

第1回

掌編がみるみる

上手くなる感想大会

—結果報告会—



「実力強化キャンペーン！ 掌編がみるみる上手くなる感想大会」とは何か！

「実力強化キャンペーン！ 掌編がみるみる上手くなる感想大会」とは、一般的に行われている完成された作品を競い合う大会ではなく、作品への感想を競い合うという今までに無い新しいタイプの大会です。

感想を書くというのは、骨の折れる作業です。ただ「素晴らしかった」「感動した」では感想になりません。実のある感想を書こうと思うと、「なぜ、この作品を素晴らしいと感じたのか」「なぜ、この作品に感動したのだろうか」という分析が必要です。

他人の作品に感想を付けるということは、とりもなおさず、その作品の良さを自分の物にするチャンスなのです。真剣になればなるほど、その作品を深く掘り下げ、または欠点を探すことになります。どこが良くて、どこが悪かったのか。この作品をさらに良くするには、どう改善すればよいのか。考えることは幾重にも及びます。

だからこそ感想を書くのはいい勉強ですよ、と薦めてもリアルな感想を書くひとはほとんどいません。酷評して人間関係を壊したらどうしようとか、場違いな感想を付けてバカにされないだろうかという恐れが先に立ちます。

ということで、いっそうのこと、感想大会にしたらどうだろう？ というのがこの大会を開催した目的です。あくまで大会です。大会だと割り切れば、素直な感想を書けるはずですよ。

そして、結果はぼくが考えていた通りになりました。みなさん、素晴らしい感想を寄せていただきました。

この大会における成果を、ぼくのブログの記事だけに留めておくのはあまりにもったいない。感想の中に創作者たちでシェアすべき技術が重箱のように詰まっています。

そこで、さらに僕がひと汗掻いて、感想大会の全てを記録に残すべく電子書籍にすることにしました。皆さんが真剣に書かれた感想を読み、意図するところを理解すれば、自然と様々な技術が身につけていきます。この小冊子が、実践的創作者のよき手引きとなることを確信しています。リアルな意見が、この中に満載されています。無料でいいのかと思うぐらいです。

すばらしい表紙は大会参加者のNAGATAさんが描いてくださいました。この場を借りて、感謝申し上げます。

最後になりますが、次回大会に参加したいと思われる希望者のために、参考として本大会開催

告知の一部を添付いたしました。こちらをお読みいただければ、大会の流れから募集要項まで理解できると思います。回数を重ねていったとしても、細かいところはさておき、基本的なシステムは変更しないつもりです。

それでは、皆様のよき創作ライフの手助けと、ささやかな目標になることを願ひまして。

平成23年9月吉日

【サイトーブログ】

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/>

【サイトーメルマガ】

<http://www.arasuji.com/saitomagazine.html>

02表彰者の発表

表彰者の発表！

節電のおり、うだるように暑い夏休みをさらに熱くした「掌編がみるみる上手くなる感想大会」も、いよいよ最後のお知らせになりました。お楽しみのお受賞者の発表です。

みなさん大会の主旨をご理解いただき、濃厚で的確な感想ばかりで嬉しい限りです。予想を超えるハイレベルな激戦となり、選考にはずいぶんと悩まされました。

しかし、終わってしまえば全ては素晴らしい思い出です。

ということで、受賞者のお名前を掲載いたします！

・ベスト感想賞 海野久実さん（『五人のパパ』+αへの感想）

【海野久実さんのHP】 <http://marinegumi.exblog.jp/>

ベスト感想賞は最もすぐれた感想に対して表彰いたします。

候補が多くて困ったのですが、この大会の主旨を考えて、作品に対する指摘が的確であり、かつ、特に改善案が優れている感想に贈ることにしました。海野久実さんが『五人のパパ』+αの改善案として提示された「卵子が人間の主体であった！」というのは、生半可な発想ではないと思います。このアイデアひとつで、様々な物語が生まれそうです。そこで、ベスト感想賞は海野久実さんに贈りたいと思います。

海野さんには、ぜひともこのアイデアでオリジナル作品を書いて欲しいです！

・ベスト感想人賞 1人 川越敏司さん

【川越敏司さんのHP】 <http://www.fun.ac.jp/~kawagoe/sakuhin.html>

5作品トータル（自作が採用されている方は自作を除く4作品）で、最もすぐれた感想を書いた人を表彰します。

何事にも言えますが、先陣を切るのは難しくて勇気のいることだと思います。その困難な仕事を、川越敏司さんが積極的に引き受けてくれました。しかも内容・質ともに濃厚な感想を残してくださったことから、後続く人たちの指針となり、全体をリードしてくださいました。

感想大会がここまでハイレベルになったのは、川越敏司さんの功績が大きいと思います。その功績を大いに讃えるためにも、ベスト感想人賞は川越敏司さんに贈呈いたします！

・ベスト作品賞 1人 『陰取』（東雲凜さん）

ベスト作品賞は、もっとも熱い感想を集めた作品を表彰します。感想の数ではなく、内容で判断します。

実は、3賞のうち、ベスト作品賞が一番悩みました。熱い感想を集めた作品と、最も優れている作品をそれぞれ表彰すればよかったと、今更ながら後悔しています。

今回は涙を吞んで、“熱い感想を集めた作品”という観点のみで選考した結果、『影取』を受賞作品としたいと思います。

感想を読んでも分かるように、本作は基本的な構成はよくできていると思います。それだけに、皆さん細かい辻褄に目が向けられて、そこから新しいアイデアや、様々な改善案が提示されました。感想にも皆さんの作風が表れていて、とても面白かったです。感想にも個性を引き出してくれる作品だと思います。

本作は、多くの方に感想を書く切欠を与えてくれたと思います！

『微分と積分』 夏目みい子

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-07-28>

本作品についてですが、作者より、応募作品は習作段階であり、感想を元によりよい作品を完成させた上でお見せしたいとの意向がありましたので、今回は掲載を見送らせていただきます。

作品をご覧になりたい方は、習作段階であることをご理解した上で、上記URLをクリックして下さい。

『微分と積分』（夏目みい子さん） への感想

夏目みい子さんの作品『微分と積分』 にコメントします。

タイトルから想像していたのとはずいぶん違った展開のお話だったので、よい意味で裏切られた感じで、楽しみながら読みました。

ドラえものの道具ですと、「ガリバートンネル」あたりがアイディアの源泉なのでしょうか？ 確かに微分・積分機で二次元と三次元を行き来できるというアイディアはとても素晴らしいと思います。

ただ、この作品の残念なところは、w博士と助手アイの性格や人間関係がそれほどメリハリをつけて描かれていない点です。もう少し言えば、アイの性格付けにあまり迫力を感じないところです。

アイは「名門貴族の娘にして、アニメオタク」で、「w博士も勝手が違うらしく、腫れ物に触るように扱う」ほど、誰にでも一目置かれている存在という設定ですが、どうして研究開発を日本のアニメから発想するほどの変人のw博士までが、勝手が違うと思うのでしょうか？ どれだけ突拍子のないパワーをアイは秘めているのでしょうか？ そのあたりが残念ながら伝わって来ないので。コスプレくらいでは、大して変人とは思わないと思うのです。

ですので、どこかでアイのとんでもない傍若無人なエピソードを描いた方がよかったと思います。そのために、w博士をむしろ極めてまっとうな人物として描くことで、アイの突拍子のなさがより強調されて、ドラマとして面白くなったのではないかと思います。

例えば、w博士はしごく全うな科学者だが、その発明品を預かったアニメオタクのアイは、それをことごとく変な名称のトンデモ・メカに改造して納品してしまう。怒ったw博士や当局の担当者が問い詰めると逆切れして、「日本のアニメをバカにする気ですか！」とか、「オタクだからって色眼鏡で見ないでください！」とかすごい剣幕で怒りまくり、周囲をほとんど困らせしめる。ところがアイを助手から解任しようにも、家の権威と財力にものを言わせて抵抗するので上手くいかない。そこで、w博士は今度こそアイを手っ取り早く処分する方法を思いついた。それが微分・積分機だった。「これを使って二次元の世界に行けば、あんたの大好きなキャラと心行くまで楽しめるよ」こうして、二次元の絵になったアイをw博士はトイレに流した。。。みたいなお話です。

あと、細かいことを言えば、舞台を架空の国、 a 国にする必然性がどこにあったのか、これもあまり明快ではなかったような気がします。

それに、優遇されているはずの兵器開発の研究者であるw博士がちっとも優遇されているように見えないのも、問題だと思いました。優遇されているなら、たくさん助手を抱えていてもよさそうですし、色々な贅沢をしてもよさそうですが、「ソバカスの散る化粧っ気のない顔」なのが、やはり不思議に感じます。あくまでw博士をマッドサイエンティストにするのなら、その設定と、優遇されているという設定をともに生かすように、w博士を造形すべきだったと思います。例えば、キャビアが好物で、研究室の冷蔵庫にいつもぎっしり詰まっていなくて気が済まないとか、変人ぶりと高級志向が合体した性格づけがほしかったところです。

微分・積分機というアイデアはとても素晴らしいと思いますので、キャラの造形にもっとメリハリを付ければ、きつもっとすばらしい作品になると思います。ぜひチャレンジしてみてください。

by 川越敏司 (2011-07-28 23:35)

基本的に川越さんと同じような感想です。

自分は理系出身で理系ネタでお話作ろうとしていたので、タイトルを見てやられたーと思ってしまいました。

でも思ったのと違う展開だったのでほっとしつつ、おお、そうくるかーと思ってニヤニヤしてしまいました。

オタクな人が2次元・3次元というネタ自体は珍しくないですが、その変換に微分・積分を持ってくるのが、おもしろいと思いました。

自分も主にキャラについて感想を述べます。

とりあえず最初にざっと読んだ印象では、博士も助手もどっちがどっちかわかりづらく感じました。

二度目に改めて読んでみたらわかりました。

自分がそのように感じてしまった理由としては、博士も助手も、キャラがかぶっているからだと思いました。

博士・・・変人・アニメから発想

助手・・・お嬢様・アニオタ

あと、ほとんどが説明で、エピソードがなかったので、キャラの印象が薄くなってしまったので

はないかと思います。

字数制限があるので仕方ないかと思いますが、博士とお嬢様の関係性がわかるようなエピソードはちょっと入っていたほうが、オチも活きるのではないかと思いました。

というわけで、自分からの提案ですが、キャラの弱さを解消するために、博士に、助手の特徴も盛り込んでみてはどうでしょうか。

博士・・・お嬢様でタカビーな発明家でオタク。

助手・・・普通の人。博士に振り回される。ツッコミ役。

(川越さんとは逆の方向ですね)

博士は大好きな2次元キャラを3次元にするという欲望を抱いて機械を作ったけれど、助手は日ごろの鬱憤を晴らすために、博士を逆に2次元へ変換しようと目論んで・・・みたいな。

次元変換に微分積分を持ってくるという発想は、とてもいいと思います。

オチから先の展開も気になります。

それによっては、意外とこのままの設定でもいけるかも、なんて思いました。

by 藤川 S (2011-07-29 01:22)

読んでまず思ったことは、発想力が刺激される作品だったということ。

微分積分機というアイテムがどんな使われ方をして、どんな事件を引き起こしてこの二人を引っ掻き回すのかという期待が、読者の読む意欲と想像力を上手く刺激しています。

それだけに、前半部の説明文と博士とアイの掛け合いが冗漫で蛇足気味に思えます。博士が微分積分機をアイに使おうと企むところで、オチがついてしまっていることも、その後どうなったのかが気になる分、残念に感じます。

いっそのこと、オチを冒頭に持ってきて博士によって二次元にされたアイが博士に復讐を誓い、二次元の体から元に戻ろうとする話でもよかったのではないかと思います。

二次元にされた生命はそのまま無生物として封印されてしまうのか？、それとも形は二次元だけどどういうわけか動いたり声を発したりできるのだろうか？、などなど面白い想像をかきたてる作品ですので、ぜひ微分積分機が使われた後の物語にすればよりテンポの良いメリハリを持った作品になるのではないのでしょうか？

最後に、キャラクターの個性については、他の方々が詳しく言及しておられるので、私もその意見に概ね同意見です。

おたく属性はどちらか一方にして、もう一方は突っ込み役として機能させる、というパーソナリティの程よい対立関係があった方が互いの個性は際立ちます。博士とアイのどちらをぶっ飛ん

だ変人して、またどちらを毒舌的な常識人として描くのかという選択もまた発想力を刺激される一要素だと思います。

by 紫仙 (2011-07-29 11:45)

冒頭から登場する微分・積分機という発明品が作品全体に良い味を出していた作品だったと思います。

ただ、作品全体として見るとちぐはぐな感じがあり読後感はあまり良くはありませんでした。なぜ作品全体がちぐはぐに感じるかということですが、それは所々でキャラクターや設定が合っていないからだと思います。

さらに言うなら最後のオチから作品の構成を考えていった場合、キャラクターや設定がその構成に合っていないと思いました。

この話の肝は、「w博士が微分・積分機でアイを二次元にしようとする」という点だと認識しています。

そのため、「戦車や空母の移送に使うはずの機能を、人間を対象に使おうとする」というのがこの作品の軸であり、それ以外の部分は作品の装飾部分であることとなります。

そう考えると、必然的に下記のようにいくつかの必須条件が浮かび上がるはずです。

- ・ w博士がアイを鬱陶しく思っている
- ・ アイはw博士の助手をずっと続ける気である
- ・ w博士がアイを解雇することはできない

また、それに従ってキャラクターを考えると

- ・ アイは自己中心的かつマイペースなお嬢様で、上司である博士に非協力的である
- ・ 博士は天才発明家であるが、アイのマイペースに付き合わされることによるストレスでノイローゼ気味になっている

というような設定が作れると思います。

今回の作品の場合では、w博士がアイを疎んじている描写や嫌っている描写が最後を除いて全くありません。

これがもし、「w博士が二次元を愛するあまりアイをも二次元に変えようとする」という話であったとしても、そこまで二次元を愛しているというw博士像の描写は皆無といって良いでしょう。

上記に挙げた数々の設定で考えられる話の流れは川越敏司さんの提示された内容と同じようなものになりますが、

作品の軸をきちんと認識しているかどうかでそれらを装飾する描写も固まってくると思います。

作品の質も向上すると思いますし、作者様の伝えたいことをはっきりさせるためにも、もし次に書くことがあれば作品の軸を意識してみてもいいのではないでしょうか。

by まこん (2011-07-29 21:02)?

ラストが弱いと思いました。

実際にアイが二次元の姿に変えられてしまった終わりの方が、インパクトがあって印象に残ると思います。

by にしはじめ (2011-07-30 10:18)

数学でコメディーとは思いつきませんでした。

数学を利用したオチが、綺麗に決まっていると思います。

ただ、設定が多過ぎて途中説明に頼るしかなかったのでは？ と感じました。

最初の発想時点の設定から、オチを活かす設定のみに絞ってから書くと、オチのキレが格段に上がるのではないかと感じます。

w博士とアイの掛け合いが笑いを誘う楽しい作品です。

設定を絞って、w博士とアイの描写や会話を増やしたらより楽しくなるのではないのでしょうか？

数学の知識を分かり易く取り入れてありますね。

硬い文章ではなく、コミカルに描かれていて

大嫌いな数学の部分も理解し易かったです。

by せきた (2011-07-30 13:11)

作品のコミカルな雰囲気が好きでした。微分・積分という自分がちょっと身構えてしまうものがテーマ（主軸）だったのですが、助手のアイが読者のナビゲート役になってるので良かったです。出だしてオチの手前の部分を持ってきて興味を持たせるのも良かったと思います。そしてその後のキャラやバックグラウンドの説明が少し読み辛かったように思います。その理由の一つとして、やはりキャラが似ているせいなのか博士のキャラが弱く感じ、どちらが主人公か分かりずかったです。（オチを見た感じでは博士でしょうか？）ので、もう少し博士の情報を入れても良かったように感じます。あとアイのキャラも、もう少しわがままだったり、鼻持ちならない所を強調したらと思いました。その他の理由としては、設定の微妙な違和感も感じました。変人で知られる博士、日本のアニメから発想を得て作った発明で苦情が多いとなると、あまり有能でない印象を受けます。その代りヒットは量産せずホームランバッターなのかも思いましたが。

なので大学の教授が助手探しを手伝うくらいなのであれば、過去の発明の成功例を出しても良かったかと思いますが。最後にオチですが、発明は壮大のものだけど、こじんまりと目先のもので落とすところは結構好きなパターンなので良かったと思います。ただオチを生かす為にも、キャラ同士の感情、立ち位置をもう少し出せてたら良かったと思いました。

by NAGATA (2011-07-30 15:04)

こんにちわ。

まさか数学の「微分・積分」をタイトルにもってくるとは、期待をうらぎってコミカルな内容で、おもしろかったと思います。

これでどんな展開がされるのかと、読むほうもわくわくしてくる作品だとおもいます。

気になった点をあげると、先に書かれている方のように、W博士とアイの個性が弱いと思います。どうせなら、個性が強い同士でオタクパワー全開でかけあって欲しかったとおもいます。

それとアイが優雅にお茶を飲み、それを出すW博士。立場が逆転している理由がわからなくて、いつからそうなったのか、お嬢様ゆえに、経済的に支援してもらっているから、無碍にできないとかいろいろな理由があれば、もっとすっきりと、物語に入り込めるとおもいます。

オチを生かすには、おもいっきりアイを実験につかい、W博士の反応をかかれたほうがより「微分・積分機」の道具にたいしてこだわりを持つ博士の気持ちがわかるとおもいます。

by 東雲凜 (2011-08-03 20:28)

ストーリー・人物設定・オチ、どれも私好みの作品で楽しませてもらいました。

ただ、高校で「微分・積分」を習わなかった私にとっては、おいていかれた感があります。

冒頭でアイを読者代表として、「微分と積分じたいがよく分かりませぬの」と言わせたのに、その説明が全くなく、a国の話にいつてしまったのは残念でした。私は、a国の話・アニメの話の部分を読みながら、頭の片隅で「微分・積分って何だろう？このストーリーを理解できるだろうか？」と考えていました。ですので、中程での微分・積分の説明をもっと早めにしてもらえるとよかったなあ、と思います。

ラストの2次元→3次元化は夢があっていいですね。「メイド帽がかたむくほどの勢いで、アイは顔をあげた」ほどですから。この部分はきっと冒頭の「助手のアイは冷ややかな視線を返した」に相對しているのでしょう。アイの中で「夢執事」を通して、利用価値を見出した瞬間だと思うので、もっとインパクトのある大げさな表現がいいと思います。

そして、「立体化は可能よ。生きた人間に変えるのは無理」というW博士に対し、「じゃあ、生きた人間に変える機械も作って！・・・お・ね・が・い。」などとウザく接し、新型兵器研究以

外には興味のないW博士は、このウザいアイをどうしたものか？と考えラストの3次元→2次元化。というオチの前のワンクッションが個人的にはあると嬉しいなあ、と思いました。

by かよ湖 (2011-08-04 00:09)

スンナリと入って読めました。とても読みやすかったです。

しかし読み終わって「えっここで終わり？」と拍子抜けしました。これから面白くなる。と言う所で終わった気がします。全部語り合うばかりで実際に微分積分機を一回も稼働させていないのが残念な気がします。

微分積分機のアイデアやアイお嬢さまのひらめきなど素晴らしいと思います。すごくワクワクしました。だから余計にガッカリしてしまいました。登場人物の名前がアイお嬢さまだけ頭文字表記になっていないので複線かなにかオチにつながっているのかという期待もしました。何もないならお嬢様と表記してもいいような気がします。あと博士とお嬢さまが2人ともオタクなら仲良くなってもいいのに。と思います。博士は変人なのでアイを愛するのに2次元化せずにはいられなかったとか。ホラーになりますね。

架空の国で兵器開発でアニメオタクで貴族令嬢の助手がメイド服で・・・とたくさん要素があるのにどれも何かの説明の為の設定に過ぎず活かしきれてない気がします。もったいない。と思いました。

by 常夏さわや (2011-08-05 00:51)

5本目から遡りつつ感想を書いてきたのは、この作品があったからなんですよ。

微分積分機？

微分積分が数学の授業に出現する以前に理解を放棄していた僕にとっては謎の言葉でしたから。だから後回しにしよってね(笑)

でもでも、面白かったです。

登場人物のキャラ設定も魅力的ですし、文章も会話もすんなり入ってきました。

アニメシリーズにでもなれば面白そうですね。

でも、もうちょっと何かが起きてほしかったです。

実際に微分積分機を使用した結果とんでもない事が起きて、更に大どんでん返しが...と言うのを期待しながら読みました。

そうだなー

例えば、微分積分機に落雷して、爆発した瞬間に地球その物が2次元になっちゃうとかね。

NAGATAさんのおっしゃるこじんまりと落とすのも好きですが、この結末では話の流れの途中で

締めくくっている感じがしたんですね。
こじんまりとしたどんでん返し見たいなね。

by 海野久実 (2011-08-05 11:37)

タイトルだけではどんな話が全く想像できませんでした。
今風のコメディですね。面白かったです。
2次元のアニメキャラが3次元になったら、みんな恋愛しなくなっちゃうだろうな～。恋愛ゲームにはまっている、うちの娘もね^^

このお嬢様のキャラと、タジタジになっている教授がいいですね。
お嬢様は無敵です。
最後の教授のセリフは、思わず本音がでちゃった、ってところでしょうか。
アニメオタクが世界を動かす日が、ホントに来るかもしれませんよ。

by リンさん (2011-08-05 18:13)

最初に読んだ感想としては、すごくあっさりした文章だったなと。
出来るだけオーソドックスに味付けをして、シンプルな読み味にしているなと思いました。
狙ってこれをやったのか、それとも、アイデアを詰め込み過ぎたせいでこんな風な文章になっているのかが気になります。

それでは良い点をば。
最初に書いたとおり、シンプルで読みやすく、多くの設定があったもののすんなりと頭に入ってきました。例えば、「ここa国では.....命じられてしまった」の部分は、自分でもそうなんですけど、アイデアをかけるだけ書きたくなってしまふのだと思います。
それを、ここまで簡潔に書くのには多分苦労したんだなと感じます。
.....え？違う？それはすいませんでした(笑)
でも、ここの一部だけで話の設定がよくわかって、良かったと思います。
他にも、先頭で多くの説明文を入れて、最後の方はキャラ同士の掛け合いがメインになる、という構成の仕方や、起承転結がはっきりしているところも印象に残りました。
お話の作り方が上手いなと感じました。

それでは、よろしくない点をば。
まず、キャラの設定を上手く使えてないところです。
変人の研究者であるw博士

お嬢様のくせにオタクで、変人の博士に付き合っている助手のアイ

なかなか、魅力的なキャラ設定だと思います。

ですが、いかんせん、博士の変人度が薄い！(笑)

これだけだと、毒舌助手が人のいい博士に毒を吐いている構図になっています。

それと、冒頭の掛け合いをもっと濃密にして欲しい！

例えば～っていうのは気が引けるのでやらないこととして、冒頭の助手と博士の掛け合いで、思わず大口をあけて笑ってしまうようなものが欲しかったです。

少し掴みが足りなかったなと思います。

それと、直感的に思ったことなのですが、これはショートショートというよりは何か長い物語の冒頭の一部を抜き出したような感じを受けました。

まだまだ面白くなりそうなショートショートだったので、もう少し先の話を読みたいですね。

長文、乱文失礼いたしました。

それでは、了

by クエル (2011-08-06 17:52)

『微分と積分』を読んで感想を書きます。

微分、積分なんて数学で習ったけど忘れてしまいました。ややこしい計算が出てくる話かなと思って呼んでみたら、W博士もアイお嬢さまもオタクの話、親しみ安く読ませてもらいました。

偉そうに権威的に振る舞うW博士は、助手が直ぐに止めるのに、アイお嬢様が助手になると、お茶も自分で入れるほど気を遣う。アイお嬢様の置かれた環境と人柄がそこに出ていて面白いです。

W博士とアイお嬢様とがよく似ているので、1回目に読んだときどっちがどっちなのか判りづらかったです。それと会話が多いですが、エピソードをいれた方が良かったです。

たとえば、W博士が試しに微分積分機を使い始めた時、アイお嬢様は使い方が全く判らないのに手を出して、大切な立体のモノが平面になってしまい、2人の葛藤があった...みたいな。何かドラえもんになりそうですが。

by 里子 (2011-08-07 15:27)

「数学でコメディ」という着眼点が、非常に素晴らしく好感をもてました。

タイトルを見ただけでは、それと気づくことは出来ませんでした。が、「微分と積分」という思い切ったタイトルだったために、数学が苦手な私でもどんな話なんだろう？ と興味が引かれ、いざページを開いてみると冒頭でいきなり出て来る『微分・積分機』という物の正体が知れた

くて、一気に読んでしまいました。

オチも自分好みで、読み終わった後ににやりとしました。

以下、気になった点を幾つか。

参考までに、次作へのお役に立てれば幸いです。

先ず、助手である少女に、「アイ」という名前が付いているにも関わらず、博士や国がイニシャルだったことに違和感を覚えました。

全員に名前を付けるか、いっそ全員名前を出さないかに統一された方が良いでしょうに思います。掌編の場合、キャラの名前が登場しないというのもありだと思います。作中に、同じ称号をもつ人が複数登場する場合は無理ですが、この作品ですと博士も助手も国も一人（一つ）ですから問題ないかと思います。

次に、他の方も書かれていらっしゃるのですが、博士と助手のキャラクターが被っていて、見分けがつきにくいのが難点でした。

恐らくは（違っていたらすみません）、オチとその前振りのためにどちらもアニメに精通しているという設定にされたんだと思いますが、「オタクをひとくりにされましても」というアイの台詞を考えれば、『博士はアニメ好き・アイは漫画オタク』でも良かったかな、と思います。私なんかはそうですが、「漫画は読むけどアニメは見ない」というオタクも存在しますので、厳密にいうとアニメオタクと漫画オタクは別物です。もちろん、同じだと感じられる方もいらっしゃいますでしょうが、その分かる人には分かるという微妙な違いを出せていたらアイの先の台詞も生きてきたんじゃないでしょうか？

また、アイのエキセントリックさの演出として、その国では貴族が漫画（アニメ）を嗜むことははしたないこと、もっと極端にすればその国自体に漫画（アニメ）の文化がまったくない（だから博士は日本のアニメから発想を得ている）、という設定があっても面白かったと思います。もちろん、少し考えれば貴族がオタクという時点で問題なのは分かりますが、やはりコスプレで登場するというだけではインパクトが弱いと感じました。

最後に、タイトルにもありますから、この作品の主軸が「微分と積分」であることは分かります。でも、果たして作中で微分と積分に関する正しい説明をきちんとする必要性はあったでしょうか？

例えばですが、冒頭を機械が完成したことに喜ぶ博士と、それを冷ややかに見る助手というシーンからではなく、研究室にやって来た助手がぺらぺらの何か（椅子でも掃除機でも何でも）を見つけたところに博士が登場し、「それこそ『微分・積分機』の威力よ！」と胸を張るというところから始まれば、微分と積分の説明を半分ぐらいカットしても、それで読者が「だから、微分と積分って何よ？」となっても、取り敢えず微分と積分の力でそういうことが出来る、という認識を冒頭から植えつけることが可能だったように思います。

高校時代の教師が言った言葉さえ覚えている、というのはアイの優秀さを物語ってもいますが、

「公式はすべて丸暗記」という部分だけでも充分表せていたように感じましたので。それで、余った文字数で、博士が助手を疎んじている伏線（例えばですが、博士の発明品に対しアイが「くだらない」と呟くなど）やら、何か他エピソードが盛り込めていれば、もっと作品に深みが出たように思います。

以上、長々と偉そうに書き綴って参りましたが、自分の引き出しでは先ず書けない（思い浮かべない）本当に素敵な作品だったと思います。

ありがとうございました。

by マイマイ (2011-08-08 23:30)

すみません。微分積分を習ったのが遠い昔で、何に使うものかあまり覚えていません。が、そんな私でも十分楽しめる作品でした。

お嬢様と博士の関係が実際の社会にも存在するからです。自分では権力を傘に来ていないと言いながら、ちゃっかりその上にあぐらを掻いてる人いますよね。

私はこの作品のオチは好きです。鼻持ちならないお嬢様が目の前にいれば、二次元でも、どこへでも行ってくれ！と思うのが普通だし、三次元を二次元化する案をお嬢様自らが提案する辺り、自分の首を絞める感じが面白かったです。人の心の機微って大切ですね。

ただ、最後のオチに持って行くには、博士とお嬢様の気持ちのずれを書いたエピソードが少なかったように感じます。

例えば、博士が「コーヒー入れてよ」と頼めば、お嬢様は「今時、助手にお茶汲み、コピーをやらせてる所なんてないですよ。ご自分でどうぞ」と一蹴したり、博士の私生活に駄目出ししたりと、やりたい放題のお嬢様と、貴族の娘だから強く言えず我慢する博士という構図を作れば、最後のお嬢様を二次元化するときの、博士の復讐にも似た黒い部分が際立つのでは?と思います。コメントを書きながら普段の自分って?と思い返しへこんで来ました。人の恨みが一番怖いですよ。

この作品は私にとって、5作品中、一番共感できる作品でした。

by 西ノ宮 ラジオ (2011-08-11 03:11)

05 『微分と積分』（夏目みい子さん）への講評

『微分と積分』（夏目みい子さん）への講評

みなさん一致されていましたが、博士とアイのキャラがかぶっているとの指摘はぼくも同感です。感想をリードされた川越さんの指摘はするどいと思います。前半部を冗長に感じた方が多いのも、キャラのかぶりが原因だと思います。キャラの方向性を正反対にすることができれば作品に緊張感が生まれますし、西ノ宮ラジオさんが欲しいと思われた「博士とお嬢様の気持ちのずれを書いたエピソード」も自然と挿入されていたと思います。

まこんさんの作品の軸を考えるといい指摘ですね。まこんさんが考えられた作品の肝を実現するための必須条件も、ひとつの案として納得できると思います。また、マイマイさんが冒頭で微分積分機を稼働させるアイディアを披露して下さいました。冒頭で機械が活躍すれば、物語の導入がさらにスムーズになったと思います。

改善案の提示としては藤川Sさん案に引かれました。博士は2次元を3次元にしたいのですが、アイは3次元を2次元にしたいと、お互いに逆方向を向いているというはいかにもショートショートらしいアイディアです。冒頭から3次元を2次元にする話がメインになっていますので、これらを全て伏線として包み込んでしまう素晴らしいアイディアだと思います。

最後に自分の感想を書きます。

ぼくが最初に気になったのは、主人公がどちらか分からないことです。冒頭はアイですが、その後はW博士と一定していません。作品的にW博士を主人公に固定するのが書きやすいかなと思いました。

また、アイとW博士と一緒に仕事をする理由付けにも苦労している印象があります。いろいろと設定を追加したために、ゴタゴタした印象を受けた方も多いと思います。ここはオチから逆算して、不必要な設定を削除すべきかなと思います。例えばですが、博士を変態マッドサイエンティスト、助手を普通に可愛い人とします。ここからは藤川Sさんのアイディアを活用いたしまして、博士は変態なので助手を2次元化しようとはしますが、助手はアニメキャラを3次元にして反撃するというオチです。なぜ助手が変態博士の元にいるかといえば、博士がシツコイのと、あとは微分積分機を逆用してマッチョ系キャラを3次元にしたかったと（助手もある意味変態であった！）という感じです。

最初に掲載した作品なので、手探りの感想が多いと予想していたのですが、みなさんガッツリとした感想を書いて下さいました。主催者といたしまして、うれしい誤算です！

『影取』 東雲凜

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-07-29>

山からの風にのって、朝には一面霧で覆われた町。僕は車で父と一緒に、父の実家に向かって
いた。昨日病院先で亡くなった祖父の告別式に参加するためだ。子供の頃はよくこの町で遊んで
いたから、ちょっと懐かしい。しかし、今日の霧はすごいな。この霧に慣れている父は、

「この町は朝に霧が発生して、太陽に虹の輪が出来た時、影取ができるんだよ」

「影取？」

「ああ、影のない子がある子の影と取ってしまうんだ。父さんが子供のころよく聞かされたん
だよ。まあ、知らない人について行くなという事だな」

ようやく霧が晴れた頃に父の実家にたどり着くと、すでに準備はおわり、後はお坊さんがきて
お経を唱えるだけとなった。父は車を車庫に入れるため、僕は先に車から降り、玄関に向かおう
とした僕の視界には、夏だというのに、厚手のオーバーを着ている少女とすれ違った。珍しくて
僕は振りかえると、彼女も僕の視線を感じたのか、振り返り視線が合った、ペコリと笑いながら
頭を下げてつられて僕も頭を下げた。彼女は再び前を向いて歩いていった。

祖父の告別式は何事もなく終わり、僕は暇になってしまい、一応着替えの服を持ってきたので
、それに着替えて少しだけ周辺を散策してみたくなった。ちょっと前まで遊んだ公園とかがある
はずだから。懐かしくてつい足を向けた。夕方なのに、残暑がきつい。公園には子供の声もなく
、セミも鳴いてはいなかった。

再び、あの少女が公園のイスに座っているのを見つけた。厚手のオーバーを着込み、最初に会
った時も、顔色が良くなかった。僕は思わず、声をかけてしまった。

「あの、大丈夫ですか？」

「.....平気です。それよりも今日は暑いですか？ 朝は霧がでて寒かったでしょう？」

「まあ、そうですけど.....その上暑くないですか？ テレビでは39度にあがったって」

「私はいつも寒いんですよ。夏なのに変に思うかもしれませんね」

まさかそのまま変です、なんて言えるわけもなく、言葉を濁らせる。なんか不思議な少女だ
と思った。ふと見上げると太陽の周りに虹がでている。視線を感じて再び彼女を見ると、ベンチ
から立ち、僕の手首をぎゅっと掴んでいた。なんだろう。そして、気がついた。彼女から感じる
違和感。そして見てはいけないものを見てしまった。本来なら彼女の後ろにある影が、彼女には
ないのだ。なんで？ と思う暇もなく突然、彼女の足が僕の影を踏んだ。同時に、僕の体は自由
に動かす事が出来なくなっていた。彼女の口元が笑っている。まるで見られた事を喜んでいる。

父から聞いた昔話を思い出していた。こんな日には影取ができる。そして、影を取られた子は神

隠しにあう。もしそうならば、僕の影が彼女に捕られるのか？

「影取……？」

「そうなるのかな。私も踏まれて捕られちゃった方だから、よくわからないの」

その声は半分涙声だった。

「わかる？ 体は冷えて、寒くて寒くて太陽に当たっても温かくなならないの。誰も私を見つけてくれないんだよ、あなたが見つけた時、帰れると思った」

彼女はもう泣きながら、笑っている。

「もう嫌なの。普通に戻りたいの。お父さんとお母さんのところに帰りたいの」

ごめんねと何度もつぶやいて、もう一方の足を影に踏み込んだ。ビクリと僕の体は反応する。重い。太陽がこんなにも暑いのに、体が寒くなってきた。動かない僕の体。彼女は僕の正面に立って、泣いていた。そして、影から僕の体をはがす為に、両肩をポンと押した。僕の影が剥がれる。その瞬間に一気に足元から冷気を帯びた何かが、頭に向かって駆け抜ける。その寒さに僕は膝をついていた。

影が取られた。

同時に彼女の影ができ、僕の影は消えている。あわてて彼女は僕から離れると、泣きながらごめんねといい、その場を走って行ってしまった。寒い。手も足もまるで氷のようになって夏の暑さなど感じない。どうしよう。朝霧のあと太陽に虹がでると、影取が現れる。今度は僕の番なんだ……手を肩にさすりながら、この先どうすればいいのだろうかわからない。のろのろと祖父の家へ向かう。やはり誰もが僕の存在に気がつかない。人の体をすり抜けて、誰かの影を踏んでみても、事が起こらない。

「うちの子見なかったか？」

心配して父が周囲にたずねる。誰も見ないというと、父は僕を見つけるために外まで出て行った。父さん、僕はここにいるよ。見つけてよ。

霧が濃い朝、虹の輪が出る太陽。神隠しにあった僕が元にもどるのはいつだろう。この町で僕を見つけてくれるまで、僕はここにいなきゃならない。

はやく、朝霧と虹の輪を持つ太陽がでて、誰かの影を奪わなきゃ戻れない。早く僕を見つけてほしい。その願いもすでに4年が経過している。僕はあの子と同じく、公園のベンチに座っていた。

「あの……大丈夫ですか」

ほら来た。僕はこいつの影を奪う。嬉しさで口元が笑う。こいつの影を早く奪いたくて仕方がなかった。そして帰るんだ……家に。

(終わり)

07『影取』（東雲凜さん）への感想

『影取』（東雲凜さん）への感想

おお～、読んでてぞわぞわっとしてしまいました。

きっちり描写されているので、映像が頭の中に浮かんできました。

なによりよかったのが、影取の少女の気持ちがちゃんと語られていたことです。

影取であること

のつらさや寂しさ、ようやく見つけた影を奪う相手、けれど相手に与えてしまう苦痛、とか、たぶんきつと色々な感情があって、笑いながらも泣いていたんだろうなと伝わってきました。

そのせつなさに、ぐっときてしまいました。

そして最後、主人公が、早く影を奪いたくて仕方ないと笑うところも、よくわかりました。

高い描写力があるからこそ、読者は共感し、物語にのめり込んでいくのだなと実感しました。

自分にはこういうの書けません(笑)

ちなみに、この主人公の年齢はどれくらいだったのでしょうか？

自分は中高生くらいかなーと想像したのですが・・・

あればよりリアルにイメージできたかなーと思いましたが、別にこのままで問題ないと思います。

by 藤川S (2011-07-29 01:59)

タイトルから、影踏みを予想しましたが、やはりその通りの展開でした。またもやドラえもんネタかなと思ったら（確か、のび太くんの影がのび太の地位を乗っ取るというエピソードがありました）、ホラーを目指した作品だったので、個人的には非常に楽しめました。

ただ、読み始めて、いくつか疑問が出てきました。「朝に霧が発生して、太陽に虹の輪が出来た時、影取ができる」というのが設定ですが、僕が影を取られた少女と出会うのは「ようやく霧が晴れた頃」です。この辺り、気象学的にはどうなのでしょう？ 虹は霧によって光が散乱されて生じるはずですので、霧が晴れてしまったら虹は見えないのではないのでしょうか？ また、僕が虹を見たという記述もありませんので、この点もおや？と思ったところです。

さらにもう少し後で、「影を取られた子は神隠しにあう」という設定が語られます。ここでも疑問が生じます。影を取られた子が神隠しにあうなら、いったい誰が神隠しにあった子の影が取ら

れたことを知っているのでしょうか？影を取られた瞬間に人の目にはとまらなくなり、話しかけても通じないのなら、影を取られた事実は誰も知りえない気がします。

あるいは、誰かの影を踏んで影を取り戻した人が証言しているのでしょうか？ それならば、影取という民話は、影を取られた経験のない父親ではなく、誰か過去に影を取られた経験のある人に語らせた方が迫力があると思います。ちょうど舞台は祖父の葬儀に設定されているのですから、例えば、祖母が、生前祖父が奇妙なことを語っていた、影を取られて何年も神隠しにあったというのだ、ということを読むといったエピソードです。

さらに、祖父の葬儀で久しぶりに父の実家に帰って来た僕が、なぜいまはじめて影取のことを知ったのかも、疑問に思ったところです。こういう子どもがかかわる怪談は、当然子どもの間で盛んに語られていてもおかしくありません。僕の年齢設定がよくわかりませんが、「子供の頃はよくこの町で遊んでいた」というのですから、小学生くらいまでこの町にいたはずでしょう。ならば、いくらでも影取について聞くチャンスはあったはずです。両親から、霧が出る日は遊びに行っ
てはいけないよ、などどと脅されて。

また、影取が現れる条件が不明な点もちょっと不満です。誰かの葬儀になるたびに出てくるのでしょうか？ 子どもにしか見えないのでしょうか？ なぜ、どういう理由で僕が選ばれたのでしょうか？ 確かに、理由もわからずに影を取られるというのも不気味でよいと思いますが、何か理由があった方がピンとくると思うのです。子どもの頃影踏みをしていて、鬼になった子をおきざりにして先に家に帰ったら、その日その子は池に落ちて溺死してしまい、以来影を取られるというトラウマに捕らわれてしまったとか、そういうエピソードですね。

最後に、影を取られた僕が影を取り戻すための条件は何でしょうか？ 誰が、どんな条件で公園のベンチに座る僕を発見してくれるのでしょうか？ 今度はどんな人が犠牲になったのでしょうか？ 例えば、僕の年齢設定を大人にして、今度は僕の父の葬儀の時、もう大きくなった僕の息子が数年前から行方不明の父（僕）を懐かしがって公園に来たら、思いがけず父の姿を認めた。僕は思う。これが影を取り戻す最後のチャンスかもしれない。だが、自分の息子の影を奪っても良いのだろうか？ という感じで、最後はリドルで終わるというのも面白いかもしれません。

影取というアイディアは、ホラーのネタとして面白いものと思います。ただ、これはわたしの趣味なのかもしれませんが、あまり何もかも理由がわからないままだと、かえって恐怖感やスリルが薄れると思います。ある程度読者に理由を明かしてこそ、何も知らない主人公が危険に飛び込んでいくのを見て、「あ、だめ、そっちに行っちゃだめ！」といった気持ちを読者に喚起できると思うのです。

あと、おそらく、もともともう少し長い作品を1800字に縮めるためだと思うのですが、ところどころ文章がおかしいと感じるところがありました。以下は参考までに、上段に原文、下段に修正

案を示しました。今後の参考にしていただければと思います。

「昨日病院先で亡くなった」

「昨日入院先の病院で亡くなった」

「影のない子がある子の影と取ってしまうんだ。」

「影のない子がある子の影を取ってしまうんだ。」

「僕の視界には、夏だというのに、厚手のオーバーを着ている少女とすれ違った」

「僕は、夏だというのに、厚手のオーバーを着ている少女とすれ違った」

「振り返り視線が合った、ペコリと笑いながら頭を下げてつられて僕も頭を下げた。」

「振り返り視線が合った。彼女がペコリと笑いながら頭を下げたので、つられて僕も頭を下げた。」

「私はいつも寒いんですよ。」

「私にとってはむしろ寒いくらいで。」

「ベンチから立ち、」

「彼女はベンチから立ち上がり、」

「そして見てはいけないものを見てしまった。」

「それは見てはいけないものを見てしまったような感覚。」

「まるで見られた事を喜んでいる。」

「まるで見られた事を喜んでいるようだ。」

「父から聞いた昔話を思い出していた。」

「僕は父から聞いた昔話を思い出していた。」

「僕の影が彼女に捕られるのか？」

「僕の影が彼女に取られるのか？」

「私も踏まれて捕られちゃった方だから、」

「私も踏まれて取られちゃった方だから、」

「その場を走って行ってしまった。」

「その場から走り去って行った。」

「手を肩にさすりながら、この先どうすればいいのだろうかわからない。」

「手で肩をさすりながら、この先どうすればいいのか思案にくれた。」

「誰かの影を踏んでみても、事が起こらない。」

「誰かの影を踏んでみても、何も変化が起こらない。」

「その願いもすでに4年が経過している。」

「そう願いながらもすでに4年が経過している。」

by 川越敏司 (2011-07-29 08:57)

「怪しい者は実は犯人じゃない」という推理小説的発想（?!）から、私は「少女は不思議ちゃんだけで、実は主人公の『僕』が最初から影取」というオチを想像していました（赤面）。ひねくれているすみません。

気になった点をいくつか。川越敏司さんのご意見と重複しますが、子供の頃（というか幼児期に、と思われませんが）なじみのあった土地なのに、その日初めて影取の逸話を聞くところに矛盾を感じました。

「知らない人について行くな」という事」と父親が解釈しているなら、それこそ口酸っぱく言い聞かされているはずなので、「昔よく聞かされた話を思い出した」にするとしっくりくるような気がいたします。

できれば「昨日病院先で亡くなった祖父」「子供の頃よく遊んだ公園」「霧」などが背景設定としてだけでなく伏線として後半で生かせたらもっと良かったかも（祖父が影取に何か関係していたとか、公園、霧の正体は実は。。。とか）。

……まあ、この字数です、「削る作業」に苦しまれたであろうことは容易に想像できます（これ以上は「自分の作品の感想」になってしまうので深い言及は避けます・苦笑）が、「夏だというのに」という言葉ではなく、夏の暑さを感じさせる描写が最初の方にあれば「夏に不適切な格好をしている少女」の異様さが際立ったのではないかと思いました。

私が書くとしたら「一応着替えの服を持ってきたので、それに着替えて」のところをカットし（おそらく喪服がわりの制服を着ていて、堅苦しいし暑いしで着替えたと思われませんが、そこまで描く字数はないので）、「蝉の声が大反響する」道。父親の運転する車は「エアコンの故障で窓を全開にしたが、拭ってもぬぐっても汗が湧く（いま思いついた表現なので稚拙な点は大目に見

て下さい)」。

そして厚着の少女…公園は蝉の声一つしない…にするかなーと。

いずれにせよ、夏に読むにふさわしい、和菓子のように涼やかな、上質なショートショートでした。雰囲気がとても好きです。

by 夏目みい子 (2011-07-29 09:48)

影取だった少女の気持ちと影取になった僕の気持ちが書かれていて心にぐっとくる作品だったと思います。

ただ、他の方も書いているように様々な疑問点が置き去りになっていて読後感はあまり良くはありませんでした。

影取についての疑問点は川越敏司さんがほとんど書いてくださったのですがわたしは心情の変化について納得がいかなかったので少し書かせていただきます。

この作品では「影取の少女」と「影取に影を取られた僕」が登場します。

そして、それぞれがどういうことを考えているかは発言や地の文に表されています。

しかし、わたしは彼らの心情の変化が少し予定調和から外れているように感じました。

●影取の少女の場合

影取の少女の心情で疑問点が残るのは彼女が僕と初めて出会った場面です。

普通の生活に戻ることを望み、最後は泣いて謝りながら影を取っていった少女。

その彼女が、自分を見つけてくれた僕と会った時の反応に違和感を覚えます。

後半の会話から推測するなら、自分が見える少年の存在に驚き、普通の生活に戻れる希望に胸を膨らませ、かつ犠牲になる僕に対して罪悪感を覚える。

そんな心情・行動が描かれてもおかしくないはずですが。

しかし、「珍しくて僕は振りかえると、彼女も僕の視線を感じたのか、振り返り視線が合った、ペコリと笑いながら頭を下げてつられて僕も頭を下げた。彼女は再び前を向いて歩いていった。

」

と、少年の存在を気にも留めず、普通の生活に戻れる希望に気付かず、かつ僕という存在から離れ去っていかうとしています。

後半で、「あなたが見つけた時、帰れると思った」

と発言しているにも関わらずです。

故にこの箇所には疑問が残ります。

●影取に影を取られた僕

僕の心情で疑問が残るのはラストです。

そして、これが読後感があまり良くない理由でもあります。

影取に影を取られて普通に帰ろうとしている僕。

その僕が、最後に自分を見つけた誰かと出会った際の反応に違和感を覚えます。

そこまでの地の文から推測するなら、いつ普通に帰れるかわからない不安、早く帰りたいという意志、誰かから影を奪わないといけないという強迫観念にも似た想い。

などの要素が基盤となっている考えられます。

しかし、「ほら来た。僕はこいつの影を奪う。嬉しさを口元が笑う。こいつの影を早く奪いたくて仕方がなかった。そして帰るんだ……家に。」

と、戻れることがわかっていたかのような発言に加えて相手が誰かもわかっているかのような発言です。

おそらくこちらは誤字であると思われるが、

「やっと来た。この日をどれほど待ちわびたことか。僕は帰れるんだ。嬉しさを口元が笑うことを抑えられない。早くこいつの影を奪いたくて仕方がなかった。そして帰るんだ……家に。」

と、いうように書いた方がいかに帰りたいかという強い気持ちが表せるのではないのでしょうか。

また、これは個人的な趣味ですが

「……平気です。それよりも今日は暑いですか？ 朝は霧がでて寒かったでしょう？」

というラストで終わるのも、影を取って取られての繰り返しこれからもあることを示唆するようでありかなと思いました。

他の方の感想を見ているとこの作品は全体的に粗があるようですが

様々な設定の詰め甘さはあるものの作品の構成自体は良く出来ていると思います。

最低限直さなければならぬ表現や書き方を直すだけでも見栄えは変わってくると思うので、もし次に書くことがあればぜひとも頑張ってください。

by まこん (2011-07-29 22:11)

ひねりが欲しかったです。ちょっともったいないなと思いました。

影を取られたと思ったら実は逆で自分が取っていた、とか。

人間と影取が逆転していた、とかすると一気にレベルが上がるような気がしました。

by にしはじめ (2011-07-30 10:26)

背景が内容とリンクしたホラー作品ですね。

伏線の引き方が良いと思いました。

ただ、必要ない箇所と感じた箇所があります。

「すでに準備はおわり、後はお坊さんがきてお経を唱えるだけとなった。父は車を車庫に入れるため、僕は先に車から降り、玄関に向かおうとした」

「祖父の告別式は何事もなく終わり、僕は暇になってしまい、一応着替えの服を持ってきたので、それに着替えて少しだけ周辺を散策してみたくなった。ちょっと前まで遊んだ公園とかがあるはずだから。懐かしくてつい足を向けた。」

ここはストーリーに直接関係が無い様に感じるので、背景や、人物などの描写に変えると、より引き込まれるのでは？ と感じます。

日本の風土に合ったホラーで、4年という月日の中で、ジワジワ追い込まれていくぼくの描写に引き込まれます。

by せきた (2011-07-30 13:51)

夏らしいホラーと輪廻モノの構造が、上手く掛け合わされていたと思います。

細かい粗を指摘するコメントが多いですが、自分はこの冷やかで湿った怪奇の雰囲気飲み込まれて、そういった拙さは特に気にせず読めました。

緻密な心理描写で少女の葛藤を描いてみたり、主人公の影を取ろうと妖しく手招きするとか、そういった描写があればホラー独特の冷えきった羊羹のごとき、じっとりと湿った冷やかさが上手く表現できるのではないかと思います。

後は輪廻ものの逆転劇を、にしさんのコメントにあるような、人間と影取のアイデンティティがいつの間にか気づかずに入れ替わっていたというどんでん返しを入れてみてもよいかもかもしれません。

なにせよ、冷えて湿ったホラー独特の感覚に優れた作品でした。

by 紫仙 (2011-07-30 14:08)

おもしろかったと思います。

無難かもですが、主人公と女の子が幼い頃に遊んでたなど、ふたりに関係性をもたせてあげるとホラーと感情描写がひきたつかもかもしれませんね。

上で指摘されてる穴なども、過去の幼い時に女の子の神隠し現場に遭遇しておけばいいですし。

主人公が女の子のこと好きだったなら、心えぐる演出ができそう～。

by おおまえ (2011-07-30 14:26)

とても面白く読めました。雰囲気伝わってきてお話に引き込まれました。

良かった点として、設定が作品世界を作っているかなと思いました。祖父の死、寒村、少年と少女の目線での物語、怪しげな迷信。キーワードだけ見ても刺激されます。

あとは期待し過ぎたせいかオチになにか一捻り欲しかったかなと思います。4年も待つはめになったというのも余韻が残って良いのですが、自分としては影取伝説を少年が終わらせるとか（解決策を発見）、他の子に同じ思いをさせない為にも一生影取として生きる決意をすとか、死んだ祖父のおかげで助かるとかにしてもアリかなと思いました。

by NAGATA (2011-07-30 15:45)

情景描写がとても上手で、読んでいて各場面の画がすぐに浮かびました。しかも、ちょっと怖い内容なのに、色鉛筆のタッチで描かれているようで、読後も嫌な気分にはなりませんでした。

ただ、違和感・矛盾点をいくつか挙げさせていただきます。

私は葬儀に携わっている仕事をしているので特に気になったのですが、・・・「昨日亡くなった祖父」の告別式を「今日」する事は時間的に無理があると思います。1日未明に亡くなられたのであれば、強引に1日夜に通夜・2日昼に告別式、という事も出来なくはありません。が、一般的には早くても1日に亡くなられたのであれば、2日通夜・3日告別式という時間設定にした方がいいと思います。

また、「告別式後・・・暇になってしまい」もあり得ません。というのは、祖父の告別式ですから、式後は火葬場に向かうと思うのです。

細かい点ですが、ストーリーとは直接は関係しないであろう矛盾点が気になり、真のストーリーに没頭出来ずに読み進めてしまう事になってしまったのは残念でした。

冒頭での僕と父親との会話内容（影取）にも違和感を覚えました。祖父の告別式に向かう車中で、父が我が子に「不吉な奇妙な話」をするでしょうか？子ども（私は「僕」を小学校高学年と読み取りました）というものは「霊」に対して必要以上に敏感になり恐怖へと発展する可能性があるからです。親ならば我が子に無駄な恐怖心を与えるような言動はしないと思います。

ですので、「父の実家に着くと、すでに準備は終わり、親戚のおじさん達がお茶を飲んでいた。僕もXXおじさんの隣りに座り一緒にお茶を飲んだ。ここに来るまでの道のり、霧がすごかったこと・虹が出たことを話すと、XXおじさんは・・・と言った。」と父でない、立場的に無責任な人物が「影取」について語るというのはどうでしょうか？

また、少女に関しても、XXおじさんに「そういえば、山田さん家の00ちゃん。4年前から・・・」などと語らせ、リアル感を出すというのはどうでしょう？

僕も山田00ちゃんとは5年前に遊んだ事があったりして・・・。

また、「彼女のうしろにある影が、彼女にはないのだ。」とありますが、この場面を想像すると、僕と彼女は向かい合っている。彼女の後ろに影は無い、僕の前に影はある。彼女は僕の手首を握っている。つまり、僕は後ろから陽を受けすでに彼女に僕の影を踏まれている。となりませんか？

ですので、「彼女の右手が僕の左手首をぎゅっと掴んだ。並んで立つ二人に後ろから太陽が日を射す。違和感。」というのでしょうか？

「父さん、ここにいるよ。見つけてよ。」は地の文になってますが、もっと叫び狂うくらいに強調した方がいいと思います。その後に誰にも気付いてもらえない事を実感し、いつしか・・・諦め。という流れです。

そしてラストの「ほら来た。」は「やっと・・・来た。」の方が待っていた気持ちが伝わると思います。そして、出来れば「来た相手」は知らない人ではなく、初恋の女の子など、「この子の影を取ってもいいものか、どうか？」と葛藤してくれると、なお良かったと思いました。

ところで、母親は来なかったのでしょうか？

by かよ湖 (2011-08-03 00:33)

ストーリー自体は、皆さんご指摘のように色んな改善点もあると思いますが、基本的に幻想的な詩情に満ちた、いいお話だと思いました。

それだけに文章をもっとストーリーに見合ったレベルにしてほしいところですね。

読んでいると、この書き方はどうかな？と思う所が頻繁に出て来て、なかなかお話に集中できなかったのです。

僕なりに冒頭をちょっと書き直してみました。

これだけでも1時間半ほどかかっています。

その朝、ふるさとの町は山からの風に運ばれた霧によって覆われていた。僕は父の運転する車で祖父の家に向かっている。昨日入院先の病院で亡くなった祖父の告別式に参加するためだ。

幼い頃によく遊んだ懐かしい風景が窓の外を通り過ぎて行く。

僕の昔の記憶の中でも、この町は頻繁に霧が発生していた様に思うが、それにしても今日の霧は広く濃く町を包み込んでいた。

「この町には、朝に霧が出た後、太陽に虹の輪がかかっている時に、影取がでるんだよな」この霧に慣れている父は、車を運転しながらひとり言のように言った。

「影取？なんだかそれ、おじいちゃんに聞いた気がする」と僕。

「影をなくした子供が、人の影を取りに来るってな。父さんも子供のころよく聞かされたよ。

まあ、知らない人について行くなという教訓なんだろうな」

やがて父の実家にたどり着いた頃には霧も晴れかけていた。

父は僕を先に降ろし、車庫に入れるために車を裏へ回した。玄関に向かおうとした僕の目に一人

の少女が歩いて来るのが見えた。すれ違いながらふと何か違和感を感じ僕は振り返った。少女は夏だというのに、厚手のオーバーを着込んでいたのだ。僕の視線を感じたのか、彼女も振り返り、二人の視線が合った。彼女が微笑みながらペコリと頭を下げるのにつられて僕も頭を下げた。彼女は振り返り、そのまま歩いて行ってしまった。

玄関を入ると、すでに通夜の準備は終わっていて、懐かしい顔や、見知らぬ顔の親族に迎えられた。

通夜を過ごし、翌日の告別式まで何事もなく終わった。

その後の一通りのあわただしい儀式までがすべて終わってしまうと、急にぽっかりと時間が空いているのに気が付いた。

少しかだけ周辺を散策してみたくなったので、用意していた服に着替えると僕は家を出た。

>僕は車で父と一緒に、父の実家に向かっていた
父という言葉が重なって、うるさく感じました。

>今日の霧はすごいな
地の文にしゃべり言葉は入れないですね。

>父は車を車庫に入れるため、僕は先に車から降り、玄関に向かおうとした僕の視界にはこのへん文章の整理をしてほしいところです。

>ペコリと笑いながら頭を下げて
ペコリと笑う？と思ってしまいました。「ペコリと、笑いながら頭を下げて」か「笑いながらペコリと頭を下げて」ですよ。

>一応着替えの服を持ってきたので、それに着替えて
「着替え」という言葉が連続するのも気になるところです。

by 海野久実 (2011-08-03 21:09)

懐かしい印象の作品です。水木しげる先生の「こだま」を思い出しました。あれはこだまはどこから帰ってくるのかを確かめに、止めろと言われていたのも聞かず山奥へ入っていった少年が見つけたこだまの持つ宝石に欲をかかれてのぞき込んで、自分が新しいこだまになってしまう。今までこだまだった少年（少女だった？）は「何百年もお前みたいな間抜けがこだまを確かめに来るのを待っていた、といて立ち去り、少年は別の、止めておけと言われても言うことを聞かない間抜けな人間がやってくるまで、ひたすら「やっほー」と呼びかける声に返事を返す新たなこだまになった、と言うような話だったと思います。「こだま」には、止めときなさいという忠告を無視し、自己中心的な考えで自分のやりたいことをやる者にはそれ相応の報いが来る、とい

うメッセージが込められているのだろうと感じます。今回の作品はどんな相手だろうがとびこんできたカモは逃がさない、という不気味さがあります。が、作者からのメッセージが欠けているために、今の自分を振り返ってこのままじゃいけない、という恐怖よりも、下手に苦しんでいる人になんか声かけない方が良くない、親切にするだけ馬鹿を見る世の中なんだなあと思われ主義を肯定しかねない、今の日本を象徴したような内容であることにこそ一番の恐怖を感じます。

by 川上 (2011-08-04 00:26)

しっかりと描写で映像が思い浮かべられます。雰囲気と静かな迫力があってそれだけでも十分な読み応えがありました。しかしラストの神隠し4年目の主人公の反応が残念です。主人公の影をとった女の子は泣く泣く影を取って行ったのに主人公は自分の憂き目を他人に味あわせることに罪悪感とかなないのでしょうか？これなら影を取られて途方に暮れてる所で終わっても良い気がします。最初に普通の子過ぎてどうしようもなくなった気がします。もっといい子過ぎる良い子でおじいさんの死をもの凄く悼んで代わってあげたいとか考えていたり。無気力で生き死になど自分の事もどうでもいいと思っていたりしたら影を取られた時に生々しい人間性が描けて作品がもっと意味深くなった気がします。ちょうどおじいさんのお葬式ですし誰かの存在が欠ける。ということを読者に意識させられると良かったと思います。上記の川上さんが言っていることと同じですが作者からのメッセージが欠けているのが最大の欠点だと思います。文章の粗さは私はあまり気にせず読めました。こんな悲劇見せられて（面白い小説なんですが）どう反応して良いやら読後に戸惑いを感じます。

by 常夏さわや (2011-08-05 13:53)

ホラーですね。

ホラーだけど、悲しい。

いいと思ったのは、影を取る女の子が泣いているところ。

ほんとは取りたくないんだけど、ごめんね…ホントは優しい普通の子供だったんですね。

だから最後に、この男の子にも「悪いけど影をもらおうよ。ごめんね」と言ってほしかったです。

それから、4年が経過している…の表現は4度目の夏を迎えた、とか、ちょっと季節感を出すといいたいな～と思いました。

by リンさん (2011-08-05 17:57)

ホラーの王道という印象を受けました。

何というか、都市伝説に有りそうな物語です。

しっかりとした描写力をベースに、上手くスパイスのきいたホラー設定、読めば読むほど味が出てくる一貫した話の筋。

お手本にしたいくなるくらい美味しいお話でした。

それでは良い点をば。

冒頭にも書いてしまいましたが、非常に描写が上手いです。何度も何度も小説を書いてきた人にしかない力だと思います。

また、話の中に出てきたアイテム(霧→影取の条件、厚手のコート→影が無くなった喪失感、着替えなどの暑さの表現→上と同じく影が無くなった喪失感・・・など)をあますことなく使っていることが東雲凜さんの構成の上手さを表していると思います。

物語として、なおかつショートショートとして洗練された作品だったと思います。

それでは良くない点をば。

多くの方が指摘されている事ではありますが、文の乱れが多いかなーと。自分はあまり気にならない方なのですが、やはり何個か目立つ点があったかなと思います。

これは見直しをすれば直せるので、ツメが甘かったのかなと思います。

他には、ラストの落とし方でしょうか。

雑誌に書いてあるようなホラーだとこれでいいのですが、ショートショートとなると、もう少しひねった落ちが欲しいです。

中盤に盛り上がるところを入れた結果、最後がおせおせになってしまったのではないのでしょうか。

最後に背筋が3回ぐらいゾクゾクするような落ちを入れられれば、もっと良いホラーになったのではないのでしょうか。

ショートショートとしてこれだけ出来上がった作品を作れる才能は素晴らしいと思います。後はツメを甘くしないように気をつければ、最高です。

この小説、自分は結構タイプです(笑)

長文、乱文失礼いたしました。

それでは、了

by クエル (2011-08-06 18:20)

「ああ怖い」と思いながら一気に読みました。私が子供の頃「夕方遅くまで遊んでいると神隠しに遭う」とか「子取りが来る」と言われました。事実、子供がいなくなる事件があちこちで続発していました。取られた子が・・・国で道を歩いていたなんてことも聞きました。それとはちょっと違うけど、恐さは、同じ。

祖父の葬式にきて昔話が、現実に関自分の身に起きたという、不可思議な話を思いついたのは流石

です。

影取の女の子が泣き笑いしながら影を取る、『自分は父母の元に帰れるから嬉しいけど、赤の他人を犠牲にしなくてはならないから辛い』ようすが上手く表現されていると思います。赤の他人だから犠牲に出来るのかも知れない。

他の人も書かれています、男の子の年齢がはっきりしないのが惜しいです。こういう現象が起きる年齢があるらしいです。『霊界通信』で読んだことがあります。私もこんな話を書いて見たいです。

by 里子 (2011-08-07 15:36)

童謡とかで扱われてそうな内容ですね。

こういった話は展開が分かっているもののドキドキして、読むスリルをゆっくりと味わせてもらえますね。

お父さんが影取りの説明をする所で、

(影のない子がある子の影と取ってしまうんだ) の所を

→影のない子が、影のある子の影を取ってしまうんだ、分かるか

とされた方が分かりやすく感じるでしょう。

重要なセリフなので、ゆっくりとした説明が必要かも知れませんね。

ドキッとした場面では、

(彼女の足が僕の影を踏んだ。同時に、僕の体は自由に動かす事が出来なくなっていた。彼女の口元が笑っている。

この場面では、読んでいる自分もハッとして描かれている文面通りに、動けないでいる自分を投影させられてしまいましたね。あまりホラーは読まないのですが、こういった文面には言霊が宿っていますね。

もっと自分が怖がらそうとしたら、目だけがキョロキョロと動く事が出来たとか入れてしまいそうですね。

他の感想も見させて頂きましたが、こういう不可解な現象は突っ込み所満載で、追及する気持ちは分かるのですがどこまでの説明を書いてどこまで書かないかが難しい所ですね。

誰かに見つけてもらわないといけないというのは、影取りにとって難しい問題ですね。

たぶん作者は同世代のまだ影取りの存在を知らない年代の人だったら、影取りを見れるって事を

言い表したいのではないでしょうか

by 蘭丸 (2011-08-09 14:46)

先ず最初の一文、「～一面霧で覆われた町」の所でゾクッときました。何かが始まる予感。公園での少女との出会い。情景描写に十分に怖くなりました。読後には何ともいえぬ、暗くて寂しくて孤独地獄から永遠に抜け出せない一種虚無感のような。。確か子供の頃に、親に叱られて納戸に閉じ込められた時の恐怖感が、ばぁ～とフラッシュバックしました。

この作品には、不気味とか背筋が寒いとか強烈な孤独感とか、を私は感じました。感覚的な内容だと思います。だから具体的な説明や描写はいらない、と思いました（リアリティ自体不必要）次元を超えた世界、モノクロで静謐で死んでいるような世界。「僕の町」はかつて実在したが今はないかもしれない。「僕」だって同じ。遠い昔の日本のどこかの町村の言い伝え。単なるホラーと言うよりも郷愁を誘う絵画的着想と文章力だと思います
デ・キリコの絵を連想させます。

難を言わせていただければ、最後の2行をもうちょっと違うようにしたらいいなあ、と思いました。

やっと自分は普通の世界に戻れそうだが、見知らぬ目の前の人間を犠牲にしても良いのか？と初めて感情を強く揺すられる僕的心情を書いたら如何でしょう。。

（暗く寂しい世界に連れて行かれた読者のためにも光を！）

by 奈津 冷子 (2011-08-10 01:21)

悲しくて、不気味なお話ですね。

でも、話の展開が気になってどんどん読んでしまいました。

主人公が影取のことを知ったのが祖父のお葬式の時というのはいささか無理があるような……。

最後に主人公の身代わりになる人物が現れたときに、主人公が喜んでますね。気持ちはわかるのですが、相手に対して、もう少し気の毒な様子で、私なら書くかな？ と思うのですが。

中身に対する感想です。怖いお話がとても苦手なものでして、すみません。

とてもすばらしい作品だと思います。

by パル星人 (2011-08-10 13:34)

読んだ後は背筋が冷たくなりました。夏向きのホラーと言う感じですね。夏なのに厚着をして、暑さを感じない子供。不気味過ぎです。田舎という舞台設定もよく、文章からも気持ちの悪さが

伝わって来て、雰囲気のある作品だと思います。

一つ残念だったのが、主人公が影を取られた後の心理描写が弱いかなと感じました。

影を取られ、神隠しに会う主人公。そこにいるはずの自分を誰も見つけてくれない苦悩や焦り、不安感。自由な所にも行けず、次の影取候補が現れるのを、ひたすら待ち続ける日々。主人公にとっての4年間は永遠と思われるくらい長かったのではないのでしょうか？きっと価値観が180度変わってしまうくらいに。

神隠し前→無邪気な少年 神隠し後→自分の利益優先でもOKな邪悪な子くらい変化すると、精神的に来るホラー観が出たかなと思います。なので、最後の影取候補が現れた場面を、もう少し丁寧に書けていればと残念に思いました。

雰囲気は5作品の中で一番だと思います。

by 西ノ宮 ラジオ (2011-08-11 02:23)

『影取』（東雲凜さん）の講評

いきなりぼくの感想から入りますが、昭和初期の純文学を想起させるような文体で、作品の雰囲気にもよく合っていると思います。文章のリズムとか、描写の量といった全体的な方向性はいいと思います。みなさんの感想も細部に立ち入ったコメントが多いので、それだけ構成面のレベルが高い証拠だと思います。

まこんさんが指摘されていますが、主人公と少女が最初に会ったとき、少女が自ら立ち去ってしまう行動の意味が見えにくいかもしれませんね。意図としては、立ち去るという行為に影を取ることへの躊躇を表しているのだと思いますが、1度目の出会いと2度目の出会いをつなげるキーワードを用意するか、それとも2つの出会いを統合するかして、立ち去る行為の意味の明確化を図ったほうがいいかもしれませんね。ぼくならですが、1度目の出会いを告別式のときにするかもしれません。葬式の途中で、ふっと窓の外を見ると、厚手のコートを着た少女が立っている。少女もぼくが気づいたことを知る。そのときは影を取ること躊躇していたので、まごつきながら逃げ出してしまうが、2度目の出会いで運命だと心を決め……なら繋がるかな。どうかなあ。

おおまえさんが指摘された青年と少女が子供のころに遊んだことがあるという設定は優れた提案だと思います。青年が少女を追いかける理由にもなりますし、ふっと過去の記憶が蘇ることで、目の前の少女が影取にあったのだと気づく伏線にもなります。

にしはじめさんが提案されているように、オチを捻るのはありかもしれませんね。例えば、ハッピーエンドにするのであれば、青年は少女の元に自ら影を取られにいき、今度は死んだおじいちゃんの影を取る（おじいちゃんは影取に会ったことがあるという設定にします。影取についても過去におじいちゃんから聞いたことにすれば、川越さんや夏目さんが指摘されたなぜ影取の話がいま知ったのかという疑問も解消されます）ことで、影取の伝説を終わらせるというのもありそうです。ところが、祖父はすでに火葬にされて……となると、急転直下のアンアッピーエンドです。この辺りは、かよ湖さんも指摘されているように、告別式は忙しいので、辻褄が合うように細かい時間を有効に利用する必要がありますけどね。

川上さんを始めとして、ラストで主人公の苦悩を入れて欲しいという感想も考えさせられます。ラストシーンで主人公を苦悩させると作品の雰囲気が変わってきますので、どちらかということ西ノ宮ラジオさんが書かれているように、価値観が変わったことを表す方向なのでしょうね。

みなさんいろいろと有意義な提案をされて、ぼくも大いに参考になりました！

『マルゴの手帳』 せきた

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-07-30>

執事マルゴはわたくしの部屋から出て行った。ドアの外には護衛が四六時中わたくしを見張っている。

閉ざされた空間では、朱色の壁がわたくしに押し掛かる。窓際の丸テーブルでは庭園の花が自由を満喫して揺れる。主人不在の城内の不穏な空気は、絵画のキリストでさえ浄化できずに漂い続けていた。

わたくしは鏡を振りかえった。そこには赤のドレスを身にまとい黄金の髪をリボンで纏めた「城主の若奥様」が淋しげにこちらを見ている。

何かがいつもと違う。

視線を朱色の絨毯の上に落とすと、紫色の手帳を見付けた。マルゴの常用品だ。

手帳を拾い上げ、丸テーブルに腰掛け手帳を撫でる。執事の物とはいえ、勝手に見るには罪悪感がある。

しかし、わたくしには城内で起こっている事件の詳細を知る術は、これしかないのだ。

コン コン コン

ノックの音に全身の毛穴が逆立った。手には手帳と共に汗を握っている。わたくしは手帳を背もたれに隠し返事をした。

入って来たのはメイドのアリスだった。わたくしが一番楽しみにしているお茶の時間だ。

アリスの入れるハーブティーは、わたくしの緊張をほぐしてくれる。

アリスは手慣れた順序で紅茶の湯気を上げる。

「アリスと話をするのが楽しみですのよ」

「光栄です」

「城内の様子はどうですか？」

「旦那様がお帰りになられるので、慌ただしいです」

「本当ですか？ 待ちどうしいわ」

「.....失礼しても、よろしいでしょうか？」

「ええ。ありがとう」

わたくしは紅茶に角砂糖を2つ、指で摘み落とす。久しぶりに旦那様に会える喜びが、ハーブの香と体を包む。勢いよく倒した背中に何かが当たった。マルゴの手帳だ。わたくしはこの部屋から解放される為に、手帳を読むところだった。わたくしは紅茶を飲み、手帳を開いた。

「6月18日

3人目の奥様が本日いらっしゃった。

お若く、とてもお美しい方だ。

旦那様は、先の奥様を転落、食中毒と相次いで亡くされおいでだ。

私は気を落としたままの旦那様が、不憫でならない。」

「8月9日

奥様は活発な方だ。

城内を散策するお姿を探すのが、私の楽しみになった。

旦那様も活発な奥様を、愛おしく想われておいでのご様子は、

側で見ている私まで幸せになる。

メイドの中には、旦那様に合わないと溢す者もいる。出過ぎた事だ。」

「8月21日

奥様は初めてのパーティーで、緊張なされておいでだった。

旦那様も、久しぶりに笑顔を見せられておられた。

パーティーの最中に旦那様の大切になさっている鎧が壊れた。

呪いなのか。

旦那様は5年前の戦乱の英雄として名が通っている。

しかし、裏を返せば沢山の命を殺めたからこそ。

殺された者の魂が呪いとなって復讐しているのか。」

「9月15日

奥様が事故に合われた。

庭を散歩中に、植木鉢が落ちてきたのだ。

幸い奥様にお怪我はなかったが、

奥様には暫く、お部屋で生活をして頂く事になってしまった。

活発な奥様には牢獄同然の暮らしたが、耐えて頂くより仕方がない。」

「9月16日

戦乱で家族を失った者が、旦那様に復讐しているという話を耳にした。

そのような境遇の者が、この城には数えきれない程いる。

デマなのか、真実なのか、確かめる術はあるのだろうか。」

「9月30日

早朝、奥様の悲鳴でお部屋に掛け付けると
大量のネズミの死骸が転がっていた。
悪意に満ちている。奥様の心中をお察しすると、お気の毒でならない。
調べると、前日にネズミ退治用の毒が盗まれていた。
警備をもっと厳重にしなければ。
それにしても、誰の仕業なのか。
毒の発見を急がなければ。」

「10月8日

旦那様は視察で暫く留守になさる。
奥様をお一人にする事を、心配なさっているご様子だ。
ネズミ退治の毒は、元の場所に戻されていた。
残量も確認した。この件は一安心だ。」

「11月13日

奥様がお部屋から逃げ出された。
お探しすると、馬小屋に隠れていらした。
ご無事を確認するまで、生きた心地がなかった。
奥様が逃げた窓の下には、獣様の罾が仕掛けられていた。
もし、奥様がその上に.....考えたくもない。
一難去ってまた一難。
早く犯人を捕まえなければ。」

「11月15日」

今日の日付だわ。

「犯人はアリスだと密告があった。

戦乱で婚約者を亡くし、荒れていたと聞く。
今日からアリスには暫く職務から外れてもらう。」

わたくしは心と喉を潰され、ティーカップと同時に床に叩き付けられた。
何処から入ったのか、一匹のネズミが紅茶の掛かった角砂糖を齧って、もがきだした。

(終わり)



10 『マルゴの手帳』（せきたさん）への感想

『マルゴの手帳』（せきたさん）への感想

ショートショートで書簡体小説にチャレンジされたのですね。意欲的でおもしろいと思います。城での謎の連続殺人事件の真相が、執事の手帳をめくるたびに次第に明らかになっていく、というのはスリルがあってよいと思います。と同時に、読者をミスディレクトする効果もあります。推理サスペンスとして、非常に楽しめました。

ただ、いくつか腑に落ちない点があります。まず、冒頭で、事件の詳細が知らされないまま、わたくしは部屋に閉じ込められたという記述がありますが、その後で「わたくしはこの部屋から解放される為に」手帳を見ることとなります。ここにはどういう論理のつながりがあるのでしょうか？ 手帳を見て真相を知れば、部屋から解放されるという条件は、どこにも記されていません。むしろ逆に、真相を知れば、おとなしく言いなりになって部屋にとどまることになるのではないのでしょうか？

また、わたくしが嫁いでくる前にすでに二人の妻が亡くなっており、旦那様に恨みを持つ犯人は、ターゲットをその妻にしぼっているらしく描かれていますが、8月21日の手帳では「旦那様の大切になさっている鎧が壊れた」とあります。これはちょっと不自然に感じました。なぜ新しい妻の持ち物ではなく、いまさら旦那様の持ち物なのでしょう？

さらに、アリスの身元について、「戦乱で婚約者を亡くし」という事実が発覚するのが、なぜこんなにも後の時点になってなのかも疑問です。すでに二人の妻が亡くなっているという事実からすれば、新しい妻の付き人の身元は徹底的に調査されてもおかしくないはずだからです。

アリスはいつからメイドをしているのでしょうか？少なくとも二人の妻を殺害しているのですから、古くからメイドとして仕えているはずで、そうだとすれば、彼女は最有力容疑者の一人のはずで、身元も犯行時のアリバイも徹底的に調査されていてもおかしくありません。仮にうまくだましおおせていたとして、それが今回は密告でばれてしまうというのでは不自然な気がします。

また、「先の奥様を転落、食中毒と相次いで亡くされ」とあり、特に二番目の妻を食中毒で亡くしているのですから、食事については敏感になっているはずで、毒見もなしにアリスがお茶を持って来ることができたのも、特にネズミ退治の毒が盗まれているので、不自然な気がします。また、「残量も確認した。この件は一安心だ」とありますが、最後はやはりその毒で殺されるわけです。その毒はどこから来たのでしょうか？

まあ、この事実は地の文ではなく、マルゴの手帳に記されているので、アンフェアとはいえないと思いますが、やはり、毒はもとの場所に残されていたが、残量が少なすぎるようだとか、そういう記述の方がよかったと思います。実際、最後に「一匹のネズミが紅茶の掛かった角砂糖を齧って」とありますが、これは紅茶に入れた角砂糖ではなく、脇においた砂糖壺の中の角砂糖だと思います。そこにも毒があったとすると、かなりの分量がまだ盗まれたままだったことになるからです。

8月21日の手帳に従えば、「旦那様は5年前の戦乱の英雄として名が通っている」にもかかわらず、9月16日の手帳では「戦乱で家族を失った．．．そのような境遇の者が、この城には数えきれない程いる」とあり、ちょっと混乱します。大多数には英雄と思われているが、一部に恨まれているというのが自然だと思います。仮に、旦那様を恨んでいる人が数え切れないほどいるとして、なぜそういう人たちを城にとどめておくのでしょうか？すでに二人も妻が亡くなっているのに？この辺りも疑問です。

また、9月16日の手帳で「戦乱で家族を失った者が、旦那様に復讐している」とありますが、なぜマルゴは今頃こうしたことを問題にするのでしょうか？すでに二人の妻が亡くなっているのですから、もっと以前にこういう考えに至ってもおかしくないと思うのです。ですので、わたくしが読んだ手帳のページをもっと以前に遡らせた方が、自然であったと思うのです。

9月30日の手帳によれば、「大量のネズミの死骸が転がっていた」のですが、「ドアの外には護衛が四六時中わたくしを見張って」いるのに、どうやってこれらの死骸をアリスは運びこめたのでしょうか？まさか、ティーセットを載せるワゴンの中でしょうか？しかし、事件は「早朝」に発見されたのですから、夜の間しかそのチャンスはなく、そんな時間にお茶を運んだとは考えられません。

11月13日の手帳によれば、「奥様がお部屋から逃げ出された」わけですが、「ドアの外には護衛が四六時中わたくしを見張って」いる上、「先の奥様を転落」で亡くされている以上、窓は嚴重にロックされているはずなので、いったいどうやって逃げ出せたのか、なぜです。

手帳によって小出しに情報を出していくことでスリルとサスペンスを盛り上げて行く手法には感心しましたが、設定に少し不整合があるように感じました。一つの案は、先の二人の妻の死が殺人が事故か不明のままなのですから、わたくしもそういう死に方にする、というのはどうでしょうか？

例えば、部屋に軟禁されたわたくしの食事はいつも冷めていておいしくない。わたくしは毎日のように執事に文句を言うが、彼はいつも悲しそうな哀れな視線をわたくしに向けてくる。ある日、わたくしはいつもより激しく彼に食ってかかる。慌てて部屋を出た彼が手帳を落としていった

。部屋を出た執事は思う。先の奥様が亡くなってもう二年。もうこれ以上、同じ悲劇は繰り返されないだろう。そう思った執事は、ようやく毒見をせずに暖かい食事を運ばせることにした。アリスが食事を運んでくる。わたくしは久しぶりに人間らしい食事ができたと喜んで平らげ、食後の紅茶を楽しみながら、執事の落とした手帳を読みはじめた。わたくしは驚愕した。先の妻は二人とも謎の食中毒で亡くなっており、そしてそれがどちらもアリスが給仕したときに限って起こっていたのだった。わたくしは手の震えが止まらなくなった。何だか息苦しい。誰か、誰か、.

と、こういう感じではいかがでしょうか？アガサ・クリスティの短編「ナイチンゲール荘」という作品がヒントになっています。

あと、締め切り間際で慌てて編集されたのか、いくつか誤植がありましたので、以下にまとめてみました。上段が原文で、下段が修正案です。

「朱色の壁がわたくしに押し掛かる。」

「朱色の壁がわたくしに重く押し掛かってくるようだ。」

「庭園の花が自由を満喫して揺れる」

「庭園の花が自由を満喫して揺れている」

「わたくしには城内で起こっている事件の詳細を知る術は」

「わたくしにとって城内で起こっている事件の詳細を知る術は」

「相次いで亡くされでおいでだ」

「相次いで亡くされておいでだ」

「側で見ている私まで幸せになる」

「側で見ている私まで幸せにしてくれる」

「旦那様に合わないと言者もいる」

「旦那様にそぐわないと言者もいる」

「奥様は初めてのパーティーで、緊張なされておいでだった。旦那様も、久しぶりに笑顔を見せられておられた。」

「旦那様は、久しぶりに笑顔を見せておられたが、奥様は初めてのパーティーで、緊張なされておいでだった。」

「この件は一安心だ。」

「この件については一安心だ。」

「生きた心地がなかった」

「生きた心地がしなかった」

「獣様の罨」

「獣用の罨」

by 川越敏司 (2011-07-30 08:43)

深い分析を込めた力強い文章の後、間の抜けた駄文ですみません。

(まっさきに書こうと思うのにいつも川越敏司さまに先を越されてしまいます……たはは)

気になったのはラストです。

「一匹のネズミが紅茶の掛かった角砂糖を齧って、もがきだした」とあり、つまりネズミには即、毒が効いたようなのにヒロインは先に紅茶を飲み、そして手帳の肝心のページを読み終えるまでできなかつたという時差に矛盾を感じました。

しかし全体的には「ありがとうございました！」です。

書簡体で背景や情報、経緯などを小出しにしていき、一気にラスト……という流れは登場人物の整理もできますし、ショートショート的手法として実に効果的なんですねー。

その手法で何か小品を書きたくなりました。

改めて気づかせてくださってありがとうございます。

by 夏目みい子 (2011-07-30 10:55)

サスペンスとしてのテンポが良い作品だと感じました。

手帳を捲るにつれ、次を早く読んでみたいと読み手に期待させる魅力があります。

日記をこっそり読む形で物語を進行させるという手法が、いかにスリリングに満ちているかを実感させる作品でもあります。

この手のサスペンスはあまり読まないのですが、ここが矛盾している、描写不足だといったアドバイスはできませんが、最後のオチが若干分かりづらかつたので、主人公の死をもっと明確に説明した方がよかつたのではないかと思います。

by 紫仙 (2011-07-30 14:42)

手帳を読み進めて謎が紐解けていくのは凄くおもしろいと思いました。
命を狙われていることを知っていてヒステリーを起こしていてもいいかもしれませんね。

もしくは、主人公の命を狙われていることを隠したいなら、捕まっているとか。
主人公に対する悪意による監禁だと思っていたら、守るために閉じ込めていたとか。
監禁された場所でアリスに毒殺されるのは、今のままでは苦しく感じたので、逃げ出した先で手助けしてくれたアリスに殺されるなど、工夫がほしいなと思いました～。

ありとあらゆる物が主人公の敵ではないかという緊迫感を徹底的につきつめていけば、凄く面白くなるのではと思いました。

by おおまえ (2011-07-30 15:13)

手帳の内容によって話を進めていく設定が面白いなと思いました。サスペンスストーリーにマッチしていると思います。全体の構成ですが、奥様が何に緊張しているのか、なぜ違和感を感じているのか何が謎なのかをもう少し早い段階で分かれば良いかなと思いました。

あと執事のマルゴーは最初に姿を見せてたほうが良いかなと思いました。探偵役は奥様（動きはありませんが）で、事件解決を実際にしているのはマルゴーなので一応人物像は知っておきたいかなと。

そしてラストにもう一捻りあると良いかなと思いました。全てを知った奥様だが、クビを言い渡したマルゴー共々すでに屋敷内では皆殺しが行われているとか、アリスを犯人に見せて実はマルゴーが犯人だったとかにしても良かったかもと思いました。

by NAGATA (2011-07-30 16:35)

人のいいところを見つけるのが下手なものですから、気になったところだけを書かせていただきます。すみません

犯人はアリスだと分かっているのに、犯行が成功してしまったカラクリが知りたくなりました。アイデアの段階で、そこから入っていればもっとスリリングにできたような気がします。

by にしはじめ (2011-07-30 18:47)

感動して興奮のあまり「改善案の提示」を忘れていました（をい）

すみません、感想の付け足しです。

ネズミには即、毒が効いたようなのに、ヒロインはすぐにきかなかったという時差に矛盾を感じ

ましたが、「大量のネズミの死骸が転がって」いるシーン（想像するだけでおぞましい〜）と、ラストのたった一匹のネズミの死は読んですごく脳内に映像が残るといいますか、印象的な場面なので、ぜひそこは生かしていただきたいです。

で、私なりにどう描くかを思ったことですが、

- ①執事がとにかく気に食わない・すぐに下がらせると手帳を忘れていた。
- ②すぐアリスがお茶セットを持ってくる・お茶とクッキーを頂きつつ軽い気持ちで読む。
- ③読んでいる最中足元に小動物の動く気配・ネズミがかけらを食べに来たらしい。
- ④ネズミなんて見たくもない・軽い吐き気と眩暈を覚えつつ足をひっこめる。
- ⑤手帳の内容は自分が命を狙われているということ（マルゴーは犯人を把握していない）。
- ⑥驚きで動悸や吐き気、眩暈が激しくなり、ふと見るとネズミが…。
- ⑦この急激な体調不良はショックからではなく、クッキーに毒が入っていたせい？ まさかアリスが。…

という流れを考えてみました。こうすれば時差の矛盾も、「アリスが犯人だと分かりながらお茶を淹れさせたマルゴーの失態」もとりあえず解消できるかなーと。

しかしオチが弱くなるかな、うーん……すみません、私の力ではここまでですが、いずれにせよ「読者にミスリードをまねく」手法として個人的には一人称語りの話しか思いつきませず、無駄に字数を費やした挙句、細部を削ることに腐心する状況だったのですが。「そうか、こういう手法があったか」と目からうろこの感動でございましたこと改めて申し上げたく存じます（あわわ、なんか支離滅裂ですみません）。

by 夏目みい子 (2011-07-30 21:48)

初めて感想を寄せさせていただきます。

よろしく願いいたします。

一人称で感情移入しやすく、書簡体でじわじわと盛り上がっていく展開もとてもテンポよく読めました。

美しい文章ですが、少し暗喩が伝わりにくいとも思いました。

他の方も指摘されていますが、

>閉ざされた空間では、朱色の壁がわたくしに押し掛かる。

こちらは、

>閉ざされた空間で、わたくしは朱色の壁に押し潰されそうだった。

などとすると、伝わりやすいのではないしょか？

また、

>主人不在の城内の不穏な空気は、絵画のキリストでさえ浄化できずに漂い続けていた。

この文章は、『不穏な空気』が『漂い続けていた』という意味の文章ですが、一文が長いので、意味が伝わりにくいかと思います。それならば、ふたつに分けてもよいのではないのでしょうか。

>主人不在の城内には、不穏な空気が漂っている。絵画のキリストでさえ浄化できないようだ。

私が好きな場面は、冒頭の『わたくし』が鏡で自分の姿を確認するところです。うまい外見描写の仕方だと思いました。

改善案ですが、アリスの描写を増やすというのを思いつきました。

お茶を淹れにきた時に、『わたくし』とにこやかに談笑する。

『わたくし』はアリスをととても信頼している。

その会話の中に意味ありげな言葉が含まれていた。

そして、アリスが犯人だと知る。

信じていたアリスに裏切られた悲しみ、毒、ネズミの死にゆく姿。

『わたくし』の絶望と、女の内面に秘められた怖さが増すような気がしました。

新参者な上に浅い分析で、お目汚しを失礼致しました。

by 文河綾女 (2011-08-02 15:47)

みなさんの感想を読むと、いちいち同感するばかりなので、ピンポイントで気になったところを書きます。

パーティーの時に鎧が壊れたり、散歩中に植木鉢が落ちてきたり、というのもアリスの仕業なんではないでしょうか？

そして、毒を盗み、大量のネズミの死骸を部屋に放置というのも？

それは主人公に恐怖を味わわせるために為された様に思いますね。

そんな事をする必要があったのでしょうか？

一番アリスが憎むべきなのは旦那様のはずだと思います。

彼を苦しめるために、そして最終的に彼を殺すのが目的なのではないのでしょうか。

主人公をじわじわ恐怖で苦しめるというのはちょっと違うような気がしますね。

1回の行動で確実に主人公を殺すことが、旦那様を苦しめる一番の方法だと思います。

鎧や、植木鉢や、ネズミの死骸などは、警戒や犯人の追及を強める結果になってしまい、頭のいい方法ではないと思うんです。

ワンチャンスで、確実に(笑)

あと、この作品はその舞台や主人公の設定の性格から、格調の高い完成された文章が要求されると思うんです。

誤字があったり、表現が稚拙だったり不明瞭だったりすると、せっかくのストーリーが生きてこないのではないのでしょうか。

冒頭の数行を僕なりに書き直してみました。

執事マルゴーは私の部屋から出て行ったところだ。ドアの外には護衛の兵士が四六時中見張りに就いている。こんな閉ざされた空間では、美しい朱色の壁でさえ、私に押し掛かって来るような気がした。

窓際の丸テーブルの上では庭園で自由を謳歌していた花々が摘まれ、花瓶に生けられ、わずかに開いた窓からの風で揺れていた。

そんな花たちに私は自分を重ねて見ているのに気が付いた。

主人不在の城内は不穏な空気に満ち、マリア様の肖像画さえそんな空気を浄化出来ずにいるようだった。

恥をさらす結果になってるかもしれませんが、こんな感じです。

十字架に架けられたキリストの絵よりもマリア様の絵の方が空気の浄化に効きそうな気がしたもので(笑)代えてみました。

by 海野久実 (2011-08-03 00:47)

この作品は気に入りました。構成が洒落ているし、流れも良くてすいすい読めます。

毒が効く時差やアリスが犯人と分かっているながら犯行が行われてしまう点は僕も気になりましたが、そこを取り繕おうとして変に説明的になるよりは、このままの方がいいような気がします。

by 平渡敏 (2011-08-03 18:44)

こんにちは。

ページをめくることに、サスペンス風のものごとりで、マルゴーはなにを知っているのだろうか？という風に魅せる手法はとても良かったと思います。

テンよく読めるのも好きです。

手帳という小道具をうまく入れて、読む側に、次はどうなるんだろうという風に読み手の意識をうまく誘導できていてとてもいいと作品だとおもいます。

気になった点をいくつか取り上げるとすると、マルゴーが密告をうけて手帳に記入した時点ですでに敏腕な執事がアリスを遠ざけなかったのか、それとも身内を疑いたくなかったのかが、文章に書かれているとスムーズにマルゴーの手帳が生きてくる思います。

あとは、どんどんとエスカレートしてゆくであろう、嫌がらせをもっと文面にかかされると、奥様の恐怖を表現できるとおもいます。これはお前を殺してやるという風に仕掛けもひどく恐ろしいものにすると、より良かったとおもいます。

もっと手帳と奥様の恐怖が比例してリンクするようにすると鮮明に情景が見えると思いました。

by 東雲凜 (2011-08-03 19:40)

サスペンスですね。

いろいろと想像をかきたてられる作品ですね。

マルゴーは、わざと手帳を置いて行ったのか。

前の奥さんもアリスが殺したのか。

職を解かれたアリスが、部屋に入ってきたのはなぜか。（ひょっとしてマルゴーも殺されちゃった？）

小説というのは、はっきりした答えがなくても読み手が想像して楽しむ、というのもアリだと思うのです。

そういった意味で、これは面白かったと思います。

by リンさん (2011-08-05 17:43)

手帳を読むまで、「わたくし」が誰なのか、いまいちわかりづらかったように思います。（自分の読解力がないせいかも・・・汗）

ミステリー（サスペンス？）として読みましたが、もう少し状況がわかっていたら、より入り込めたかなーと思いました。

ですが逆に、手帳を読むことで、徐々に（自分が読んでいて）よくわからなかった状況が明らかになっていったので、早く続きが読みたい！という気分になりました。

そして最後、犯人がわかったときには時すでに遅し！

一気に落ちる、という構成でしたので、結局はおもしろく読めました。

他の方がいろいろと改善案を提示されているので、今さら自分が言うことはないかと思えます。

しいて挙げるとしたら、導入の入りやすさ、くらいですが、そのへんも含めて、細かい文章の書

き方みたいな話なので・・・
これはこれでいいなと思います。

by 藤川S (2011-08-05 22:55)

手帳（日記）というアイテムを使って、過去の事や起こりつつある事が明らかになっていく手法は、非常にドキドキし、楽しめました。

ただ、「わたくし」の行動で気になった点をあげさせてもらいます。

マルゴーの手帳を見付け、読もう！と決めた直後にノックの音がした為、「全身の毛（穴）が逆立った。手には手帳とともに汗を握っている。わたくしは手帳を背もたれに隠し返事をした。」のですから、この時点では、わたくしにはやましい気持ちがあり、アリスに対して「早く出て行ってほしい」と思っていたのではないのでしょうか。そして「早く読みたい」とも。すると、次の「アリスと話をするのが楽しみですのよ」は「アリスの淹れる紅茶が楽しみですのよ」のほうが自然だと思います。

また、アリスも「話をするのが楽しみ」と言われた割には、あっさり「失礼しても、よろしいでしょうか？」と切り出しているところは、主従関係に不自然さを抱きます。「話」を「紅茶」に変えた方が、全てしっくりといくのではないのでしょうか？

「勢いよく倒した背中に何かが当たった。マルゴーの手帳だ。」も不自然です。この間、本当に手帳のことを忘れていたのであればこのような表現ですが、「読みたい！読みたい！」という気持ちがあるなら、「アリスが部屋から出るのを確認し、背もたれに手を伸ばした。マルゴーの手帳だ。」などの方がいいと思います。

「わたくしは紅茶を飲み、手帳を開いた。」も優雅すぎる気がします。「わたくしは手帳を開き、乾いた喉を紅茶で潤した。アリスの淹れたハーブティーが全身を癒してゆく。」などいかがでしょうか。

「11月15日」。「今日」でなく「明日からアリスには・・・外れてもらう。」だとつじつまが合う気はします。ただ、マルゴー、そんなにゆっくりでもいいのか？という気もしますけど。

。。

ラストの「わたくし」の描写は、もっとストレートで分かりやすい方がいいと思いました。色々書きましたが、素晴らしいプロットの作品だと思います。

by かよ湖 (2011-08-06 02:22)

手帳の記録を読んでどんどんとこれまでの経緯や主人公の状況が分かって行くのは面白かったです。犯人が主人公のお気に入りの召使でついさっきお茶を入れに来た人だった。というのも面白いですが、しかし納得いかない所も多いです。執事ともあろう者が常用品の手帳を落としていくのがなんだかわざとらしく感じます。マルゴーは手帳に今日の日付で容疑者特定ができていくのにそのことを奥さまに伝えもせずそのままとても不自然です。奥さまよりもアリスを拘

束しろよ。と書いてしまいます。あとアリスのやっていることと動機があまりしっくりこないとか身内を殺された恨みならさっさと奥さまを殺してしまえば良いのに。と思います。旦那様不在の城で奥さまにネチッコイ嫌がらせをしているところみるとアリスは旦那様のお手付き女中で嫉妬に狂っている。と思いました。（発想が下品ですみません。）

実はマルゴーが犯人で主人公を絶望させるためにアリスを犯人だと思わせた。なんていうのもいいかと思います。旦那様不在の城ではおそらくマルゴーが実質的責任者だと思われるのでマルゴーの立場なら前妻の殺害もやってのけると思うのです。マルゴーの犯行の動機・・・実は旦那様の愛人でってギャグになってしまいそうですね。すみません。

by 常夏さわや (2011-08-06 15:53)

非常にコクのあるストーリーでした。執事の手帳からわかる犯人、という構成で文章に深みを持たせ、犯人の意外性によって後味をすっきりさせる。

文章の使い方が上手いなと思いました。

ショートショートとして、とても面白い作品でした。

それでは、良い点をば。

発想がすごいです！

手帳を読んでいく、という書き方でサスペンスの「徐々に犯人像がわかっていく」という形式を表すのは、並大抵の発想ではないなと思いました。

また、自分が気になっていたアリスの反応の悪さ。これが最後に活かされているのがとても印象に残りました。あれだけだと、ひょっとしてアリスが犯人なのでは？と感じるかも知れませんが、その後に手帳の引きがはいることで、見事に目をそらされました(笑)

他に自分が良いなと思ったのは、「花が自由を満喫して」や「絵画のキリストでさえ浄化できず」の例え描写です。これ、一番自分が好きな描写のしかたなんです。(笑)

ショートショートサスペンスとしては非常にレベルの高いものでした。

それでは、良くない点をば。

皆さまが指摘されてる通り、サスペンスとなると矛盾がとても気になります。ラストのネズミもそうですが、自分が思ったのは、最愛の妻を二人も亡くした夫が城を留守にするような事をするかなということです。ましてや、自分に復讐するような奴がいる城の中に。例えば、妻と一緒に連れていくとか、なんとかしそうなものですが。

他には今日からアリスには職務を離れてもらおうと書いてあるのに、今日もアリスが紅茶を出してきた、というところでしょうか。

サスペンスはリアルさというのが大事なので、そこをもっと重視して、矛盾を出来るだけなくしてほしかったなと思います。

設定、文章の構成は申し分ないくらい完成されているので、小説の種類に合わせて、何が一番大事かを見極めることをして欲しかったです。

長文、乱文失礼いたしました。
それでは、了

by クエル (2011-08-06 18:55)

手帳を読み進むごとに謎がだんだん解明されていくという手法に感心しました。
執事がいるお城の奥様の命をねらう、誰も疑うことをしない、当たり前にいる「メイド」が犯人だった。誰かの作品で読んだような気がしたけれど面白かった。主人公「わたくし」をせき立てながら今日の日付の所まで読んで犯人が判ったところで死んでしまう、むなしいなあと思う。一番楽しみにしているお茶で命を奪われる、人のスキを上手く付いている。ここまで読んでマルゴーはわざとに手帳を落として行ったんじゃないかなと想像してしまいました。
最後の所でもがき苦しむ表現？ があってもよかったのではないかと思いました。

by 里子 (2011-08-07 15:42)

どきどきしながら読めました。
初めの所で、この主人公は囚われ人なのか？ と少し勘違いをしました。
奥様が心を許しているアリスに命を奪われる……なんということだ、などとお話に引き込まれてしまっていました。上手いですね。
奥様が毒入り紅茶で倒れたときに、アリスが自分は恋人を戦争で亡くし、その復讐のため、奥様を殺しに来たのだと死んでいく奥様にアリスが話すように、私だったら書くかもしれません。
せきたさんの作品を読んで、こういうふうなオチがあるということが勉強できました。
面白かったです。

by パル星人 (2011-08-10 12:46)

文章からは可愛らしい印象を受けますが、内容はサスペンスの王道のような作品ですね。
残念だったのが、サスペンスの割りに登場人物が少ないかな？と思いました。サスペンスと言えば犯人当て。犯人当てを楽しんでもらうなら、複雑に絡み合った人間関係。今回の作品では犯人は、マルゴーかアリスのどちらかになってしまいます。
お屋敷という密室で奥様を殺せる可能性は、コックでも庭師でも十分あるはず。
マルゴーの手帳という良いアイテムがあるのですから、手帳を少しずつ読み進めるうちに、このお屋敷の異常さや秘密が出てきたら、ホラー要素も入れられると思います。

文章が短く読みやすいので、複雑な描写も十分書けるのではと思いました。

by 西ノ宮 ラジオ (2011-08-11 00:50)

11 『マルゴの手帳』（せきたさん）への講評

『マルゴの手帳』（せきたさん）への講評

ぼくこの作品を読んで、一番気になったのが、にしはじめさんを始めとして何人かが指摘してくださった「なぜ犯人がアリスだと分かっているのに犯行が成功したのか」という点です。

逆にぼくがまったく気がつかなかったのに、多くのひとが指摘してくださったのが、毒薬の時差です。人間とネズミでは毒に対する耐性が違うから……と安易に考えていたのですが、用意された毒薬は低濃度でも致死量に達すると思われるので、死亡するまでの時間を統一する必要がありますね。みなさんの感想レベルの高さに脱帽です。

時差の矛盾の解消については、夏目みい子さんの提案が優れていると思います。最後にネズミの死体を発見したときの驚きが、ラストを盛り上げてくれそうです。

時差以外については、おおまえさんの「あらゆる者が主人公の敵と思わせる」のは、いい作戦ですね。城内の不気味さが増していくと思います。

いきなり話を戻しますが、設定の粗については川越敏司さんが指摘してくださいました。主人公を部屋に閉じ込めなくともストーリーは成立すると思います。読者に疑問点を浮かばせないためにも、設定はもっと削り込んでもいいかもしれません。海野久実さんの”殺すときはワンチャンスで”という指摘も頷くところです。植木鉢は事故と見せかけるにしても殺害の不確実性から中途半端ですし、足もつきやすいと思います。ネズミの死骸は毒の実験との解釈も可能ですが、すると、マルゴが毒の量を確認したのと矛盾します。ここも設定を削り込む部分かもしれませんね。設定を削る代わりに、文河綾女さんが提案されている奥様の描写を増やすというのが、バランス的にもいいかもしれません。

自分ならどうするかと聞かれると難しいですが、おおまえさんの提案を基本線として、あらゆる者が敵に見えるという殺伐とした雰囲気を出すかもしれません。例えばですが、こんな感じ
です。

「奥様の実家の貴族が、友好を深めるために、近々この屋敷に来ることになっている。実は奥様は主人と反りがあわず、これを機に実家に帰ろうとしていた。

奥様が待ち焦がれた日の朝、奥様はマルゴの手帳を拾い上げる。そこにはこう書いてあった
。

“ただでさえ、2名の奥様が亡くなられている。これ以上、犠牲者が増えらるとご主人様に悪いうわさが流れてしまう。だから、私は必死に奥様を守り続けてきた。犯人はご主人様に恨みを持つアリスと知った。ところが、奥様は家族が来訪した機会に、実家に戻るつもりだと知る。奥様が実家に戻ってしまうと主人のメンツが潰れてしまう。主人のメンツを守るためにも、アリスをそのまま泳がして奥様を殺させ、その後アリスを告発することでご主人様のメンツを守るしかない

。それにアリスの事件をきっかけに、アリスの出身国を攻撃できる。一石二鳥ではないか”
しかし、この手帳が真実であるとの保証はない。マルゴーもアリスも表面上は忠実に見える。
さて、奥様は何を信じればいいのか？」

ラストはNAGATAさんの提案を参考にさせていただきました。

このぼくの提案は、みなさんの感想を元に練り上げました。三人寄れば文殊の知恵といいますが、このことわざは真実を射抜いていますね。

『三つの願い』 NAGATAさん

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-07-31>

とある研究所。白衣を着た老人博士が、今まさに歴史的瞬間であると興奮している。

「ついに完成じゃ。これは今世紀最大の大発明じゃぞ。本当に、本当に長い道のりじゃった」
博士の前にはひとつのランプが置かれている。

「これが夢にまで見た魔法のランプじゃ。実現させることを思いついて、はや40年。いろんな苦労があったが、そんなもんは全て吹き飛んだ。この感動に比べたら屁でもないわい」

博士は子供のように目を輝かせランプを見つめる。

「ふむ。それではいよいよランプの魔人を呼び出してみようかのう。昨日ひと拭きして煙が出たんじゃ、今日は思う存分磨いてみるとしよう」

ポケットからハンカチを取り出しランプを拭いてみる。

キュコキュコ。

「出でよ、ランプの魔人」

ランプの口から勢いよく煙が吹き出され、天井まで立ちこめたその中からランプの魔人が現れる。

「おお、そなたはランプの魔人か？」

「いかにも」

「やったぞ、本当に呼び出せるとは。大成功じゃ」

喜びに浸る博士をよそに、そろそろ本題を切り出そうかと、腕組みをしてタイミングを見計らっている魔神。

「うむ、大変喜んでるところ、さらに嬉しいことを教えてやろう。オレ様を目覚めさせてくれたお礼に、何でも三つの願いを叶えてやろう。遠慮なく言っていぞ」

「待ちました。魔法のランプといえは三つのお願い。もうすでにひとつめの願い事は決めてあるのじゃ」

博士の笑顔がさらに満面の笑みへと変わる。

「まずはこの記念すべき日を祝いたいじゃ。とびっきりのご馳走と、盛大な宴の席を用意してほしいじゃ」

「うむ、わかった。お安いごようだ」

魔神は指をパチンパチンと鳴らしてみせる。するとテーブルの上に、目にも鮮やかな豪華な料理が現れ、次々と並べられていく。

「こりゃすごい、豪勢じゃわい」

さらにウサギやクマの人形がどこからともなく現れ、飲めや歌えの大騒ぎ。博士も高価なワインを片手にご馳走を頬張る。

「こんな楽しい食事は初めてじゃ。そら、魔人よ。おぬしもどうじゃ？」

魔人はクビを横に振り、

「酔っ払っちゃまっちゃあ、ちゃんと願い事を叶えられなくなっちゃうよ」

と、やんわりと断る。

「魔神の鏡じゃな。よし決めた。二つめの願いは、一杯だけわしに付き合うこと。どうじゃ？断れんじゃろ？」

魔人は肩をすぼめる。

「うむ。それじゃ仕方がない。一杯だけ頂こうか」

博士はグラスにワインを注ぎ嬉しそうに手渡す。

「わしゃ、おぬしにも喜んでもらいたいんじゃ。なあに、一杯くらい平気じゃよ。勤勉もほどほどにじゃ。ではランプに乾杯」

二人はグラスを合わせワインを飲み干す。楽しいひとときはあっという間に過ぎ宴の席が終わる。

「実に愉快じゃった。大満足じゃ」

「喜んでもらえたようだな。これで二つの願いは叶えられた。残りはあと1つ。さあ最後の願いを訊くとしようか」

「うむ。実は残りももう決まっておるのじゃ。わしはこの40年間魔法のランプのことだけを考えてきた。他の者からは悪魔的だなどと言われて後ろ指を指される扱じゃった。しかしこうして夢を叶えることが出来て、わしは本当にいい人生を送ってきたと思うとるんじゃ」

博士は遠くを見るように目を細め、感慨深く今までのことを振りかえる。

「そして今日という最高の瞬間をもう一度だけ味わいたいじゃ。じゃから記憶を消して40年前の、初めて魔法のランプを創ろうと思ったあの日に戻して欲しいじゃ。それが最後の願いじゃ」

「.....そうか、わかった。ランプの願いに不可能はない。ではいくぞ」

「きっとまた40年後に会えるじゃろう。達者でな」

魔神は博士に向かってパチンと指を鳴らす。と同時に博士が消える。

「やれやれ、40年後か。きっとまた同じ事願うんだろなあ。これでもう七回目だし.....ま、いーけどさ」

そして魔神も消える。

(終わり)

13 『三つの願い』（NAGATAさん）への感想

『三つの願い』（NAGATAさん）への感想

オチが見事に落ちてる作品です。
どういふことかと言いますと、
三つ目の願いを叶え、
どこかホロリとセンチメンタルになっている博士に対し、
最後の魔神の「相も変わらない人間」へのボヤキが、
人間ってこうだよなあ、と思わず苦笑しつつも頷いたり、
人生について考えたりしてしまう要素があります。

この博士も、祝ってくれる誰かを求めている点では、
不器用な寂しがり屋で、
平凡な人間関係を築ける人だったら、
こうはならなかったかもしれない。
でもあえて、孤独で困難な茨の道を歩きたがるという、
ストイックな求道の果てにある達成のカタルシスは、
何にもまして蜜の味がするものかもしれせん。

by 紫仙 (2011-07-31 06:54)

アラジンと魔法のランプのパロディかと思わせて、実はリプレイものでしたね。人生をリセットしてもう一度やり直す、というのはSFでは色々と試みられているテーマであります。グリムウッドの『リセット』はこの分野の代表と言えるものでしょう。

分類の仕方は色々あると思いますが、能動的リセットと受動的リセットとしてみるのもよいと思います。

能動的リセットでは、自らの意志でリセットするタイミングや遡る時間・場所を選べることになります。『時をかける少女』はその古典でしょうし、最近だとラノベの『サグラダ・リセット』などもその例になるでしょう。リセットできる回数や、リセットできる時間・空間的距離に限度があるというのが典型的な制約条件になると思います。

受動的リセットでは、自らの意志に関係なくリセットされてしまうことになります。時間ループに閉じ込められた人がそこからの脱出をはかるといふのが典型的なストーリーですね。最近だと

ハルヒの短編「エンドレス・エイト」（アニメでは物議をかもしました）があります。ここでは、誰（何）が何の目的で自分を閉じ込め、どうやったらそこから抜け出せるか、謎解きのスリルがあります。森絵都『カラフル』もそうした作品ですね。

これに関連して、並行宇宙ものや時代改変ものがあります。典型的には愛する人の死を回避するために、異なる時空間に移り、彼女が死なない世界を探すというような話です。古典では『戦国自衛隊』や『フィラデルフィア・エクスペリメント』でしょうか？最近だとやP.K.ディックの短編「アジャストメント」（映画化されましたね）や『Steins; Gate』がそういう作品ですね。

古典的なテーマですが、決して古びていない素晴らしいテーマだと思います。

今回の作品について言うと、実に楽めました。基本的に設定やプロットにキズはなく、スムーズに読むことができました。

今回の作品の特徴は、博士がリセットする時期を指定できるという意味で能動的リセットの側面があるのですが、メインのプロットは、前世の記憶を保持している魔人が相も変わらない博士の願いに付き合わされるという点で受動的リセットであるところです。

そのように作品を理解した時、気になったのは、呼び出された魔人は、博士の人生のリセットが七回目で、また同じことを願うという記憶を保持していながら、これに対してのボヤキが最後にしか出てこない点です。むしろ、「皆まで言わんでもおぬしの願いはわかっておる」とか、嫌々ながら博士の願いを聞くとか、ある程度途中でリセットをほのめかす伏線を張っておいた方が良かったと思うのです。

また、人間にとっての40年は実に長い期間ですが、では魔人にとってはどうなのでしょう？もしそれが魔人にとっても長い期間ならば、「懐かしいの～またあんたか」みたいになるでしょうし、もし魔人にとって一瞬であるなら、例えば、2回目の願いで飲まされた酒（1杯目ではなく、7杯目になる）がまだ残っていて酔っ払っているとか、そういうことになると思います。

わたしの好みは後者で、博士の前に現れた魔人が始めから酔っ払っており、「なんじゃ、魔人よ、おまえ、こんな朝っぱらから酔っ払っておるのか？」などと博士に言わせ、読者にいったいどうしてだろうという疑問を持たせたほうがオチが利いてくると思います。自堕落でのんべえの魔人かよ、と思わせておいて、実はリプレイものだったというショックを与えるのです。

もうひとつ、「今日という最高の瞬間をもう一度だけ味わいたい」という博士が、再び40年前に戻ることを希望することに、少し違和感があります。一日前とか、一週間前とかではなく、なぜつらい時期を含む40年前なのでしょう？しかも、不遇の40年を今度はポジティブに生きなお

そうというのなら、記憶は保持したままの方が効果的ですよ？40年後には必ず魔法のランプを完成できるという確かな希望を持って取り組めるのですから。

ですので、40年前に記憶をなくして戻るとい博士の動機づけがもう少しほしいと思いました。例えば、完成したランプをもって過去に戻ること、完成するかどうかわからない発明に打ち込んでいた時に自分を見捨てた婚約者とよりを戻したいとか、自分の才能を信じながらも完成の日の目を見ることなく亡くなった母に恩返しをしたいとか、そういう動機です。

全体に実にスムーズに流れるように書かれているので、どこかで、あれ？なんで？と心に引っかかる部分を作って伏線にすると、もっと面白い作品になると思います。

最後、「博士が消える」「魔神も消える」はどちらも「博士が消えた」「魔神も消えた」という表現の方がよいと思います。前者だと芝居のト書きのようですので。

by 川越敏司 (2011-07-31 08:11)

前回のコメントの最後辺りに書いた、40年前に記憶をなくして戻るとい博士の動機づけに関してのわたしの対案が少し不適切であったので補足したいと思います。

次のように考えれば、こういう設定もありかな、と思い始めました。

40年間、人にさげすまれ、後ろ指を差されながら、研究に打ち込んでようやく魔法のランプが完成した。これで目的を達したので、次の人生では、自分の才能を信じながらも完成の日の目を見ることなく亡くなった母に恩返しをしたい。だから、二度とこんな報われない発明に取り組むことのないように、記憶を消して自分を40年前に戻してほしい。こういう願いを博士がもつ、というのもありだと思います。

その上で、性懲りもなく、魔法のランプ発明に取り組む若い博士を見て、魔人は人間の決心のよろさ、おろかさを痛感する、というオチです。

今後の参考にしてください。

by 川越敏司 (2011-07-31 08:27)

わわわ、またまた川越敏司さまの直後ですか（汗）

純粹に個人の意見を書きますので、あえて川越敏司さまのコメントを読まずに書き進めます、も

し重複していましたらすみませんです

気になったのは魔法のランプを「博士の発明」としたところですが
どうせ発明するなら3つだけじゃなく、一定期間が過ぎたらまた願いを聞いてくれるとかもっと
効率のいいものを作りそうなので（てか、欲張り丸出しですね、私・苦笑）

「ランプの存在を示す文書を信じて発掘し続けた老探検家」のほうが
設定としてじっくりくるかなーと

あと、オチの伏線としてお酒を勧められたとき

魔人が「.....うげ（またかよ）」的的表情なりサインなりをするともっとスコンと決まったかも、
なんて思いましたが

タイトル・内容とも古典的王道にして

「古い革袋に新しいワイン」のごとくいくらでも物語は生み出せるのだというお手本のような作
品でございました

読後の印象は本当に爽快で、ストライクが決まった気分です

by 夏目みい子 (2011-07-31 09:01)

コメントに誤植がありましたね。

グリムウッドの『リセット』

→グリムウッドの『リプレイ』

あと、夏目みい子さんの「ランプの存在を示す文書を信じて発掘し続けた老探検家」という案に
、わたしも一票です。

by 川越敏司 (2011-07-31 09:31)

「魔法のランプって発明するものなの？」という疑問が冒頭から頭を離れませんでした。

でも、まんまと落とされてしまったので「負け惜しみです」。

繰り返しの回数を何回にしようかと迷われたと想像するんですが、

個人的には『49回目』くらいだとバカバカしさが増幅されて、なお好みです。

by にしはじめ (2011-07-31 19:15)

ストーリー展開がスムーズで、まんまとやられました。

私も、にしはじめさん同様「魔法のランプを発明するの？」という疑問を持ちました。しかし、オチを読んで納得です。冒険家より発明家の方が、このストーリーに合ってますね。

博士の輪廻に付き合わさせられている魔神が
淡々と博士の願いを聞くシーンは微笑ましいですね。

by せきた (2011-08-01 18:17)

冒頭でいきなり引っ掛かってしまいました。

「老人博士」という言葉に違和感を感じたんですよ。

「老博士」なら感じない。

なんででしょうかねー

同じような言い方の「老人探偵」なら感じない。

間違いではないけれど、あまり聞かないから違和感を感じたんでしょうかね。

それはさておいて、何かを発明する博士なら、「博士」より「科学者」とか「科学博士」の方がよかったのではないのでしょうか？

ただ「博士」なら「文学博士」や「哲学博士」もいるので、ここは科学分野の博士だという事を明確にした方がいいと思いました。

しかし、科学博士の発明品が魔法のランプというギャップにぶっとびました。

これはそういうギャップのある組み合わせで書きたいと作者が意識した上の事なんでしょうか？
そうでなければ、夏目みい子さんの「ランプの存在を示す文書を信じて発掘し続けた老探検家」という設定の方がすっきりまとまると思いました。

「考古学博士」とかね。

このまま行くなら、もっと徹底的にそのギャップを楽しませるところまで行けばよかったと思うんですよ。

「そして今日という最高の瞬間をもう一度だけ味わいたいじゃ。じゃから記憶を消して40年前の、初めて魔法のランプを創ろうと思ったあの日に戻して欲しいじゃ」

これが最後の願い事なんですよ。

でも、この願い事にはパラドックスがありませんか？

「もう一度だけ」という言葉がありますよね。

「もう一度だけ」と言っているのに、何度も繰り返すというのは願い事を聞いていないという事になりませんか？

このパラドックスを解決するには、過去に戻った博士が、もう一度魔法のランプの発明に没頭し

て成功する。

そしてまた同じ願い事をするものの、今度は結局博士は成功しなかったという事にするんです。もちろん魔人がそういう風に持っていくわけですね。

「もう一度」って言ったんだから二度味わえばいいんじゃないかい、という事ですね。ん？まだパラドックスが残ってる？

「パラドックスのある願い事は、聞けません」という事にしましょうか？

by 海野久実 (2011-08-01 21:56)

星新一先生の名作「鍵」を思い出しました。

もしかしてオマージュでしょうか？

オチは面白くていいです。

にしはじめさんの「49回目」もいいアイデアだと思います。

主人公については、僕も「冒険家」に1票なのですが、せきたさんが発明家の方があっていると
する根拠はどこにあるのでしょうか？

by 平渡敏 (2011-08-03 17:00)

三つの願いというタイトルで、一瞬アレという感覚がありました。

タイトルから魔法のランプという連鎖ができてなかったのも、これで、意表をついた作品内容
だとも思います。

文章も読みやすく構想もよく練られるとも思います。

先にかかれた方おのように「老博士」に言葉は、外界と接触を避けているので、一人称が「わし」
にはならないとも思いました。

なぜそこまで何かを求めているか、なぜ魔法のランプを必要としているのかが書かれていない
ので、年をとるたびに、なにを考えていたか、などの博士の心情などがかかれていれば、もっと
おもしろくなり、もう一度この体験をしたいのと思わせる箇所があつていいと思います。

by 東雲凜 (2011-08-03 21:09)

感想 (2)

*主催者注：せきたさんの最初の感想の修正版です。

ストーリー展開がスムーズで、まんまとやられました。

私も、にしはじめさん同様「魔法のランプを発明するの？」

という疑問を持ちました。しかし、オチを読んで納得です。

主人公の職業は、

人の手助けが必要な冒険家より、一人で、同じ場所で仕事出来る発明家の方が、この、一人で輪廻を楽しむストーリーに合ってますね。

これぞ、究極のお一人様だと感じました。

博士の輪廻に付き合わせられている魔神が

淡々と博士の願いを聞くシーンは微笑ましいですね。

by せきた (2011-08-05 13:27)

面白いですね。

3つ目、何を願うのかいろいろ想像しましたが、そう来ましたか！

ド〜ンとオチでしたね。楽しい裏切りです。^^

この博士、すごい発明をしたのに、ひとりぼっちなんですね。

いっしょに成功を祝う友達もいなくて研究に没頭していたんですね。

可哀想...

だけど出来上がったときはよほど嬉しかったんでしょうね。

7回も同じことを繰り返すなんて。

山登りもマラソンも、達成感を味わうために苦しさには耐えるといいますが、人間とはそういう風に出ているんですね。

だけど、この博士は欲がないんですね。

欲がないのに何故このランプを作る？ちょっと笑いました。

by リンさん (2011-08-05 17:20)

おもしろかったです。素直に楽しめました。

リンさんと同じく、3つ目の願いをどうするんだろ〜とときどきしてたら、そうきたかーという感じでした。

川越さんや夏目さんが提案されているように、魔人のセリフや様子で、何度も繰り返していたのだ、という伏線が張られていたなら、よりおもしろくなっただろうなと思いました。

まさに振り出しに戻る、という感じで、探検家バージョンでもおもしろそうだなと思いました。

それにしても、40年前まで戻るというのは、なかなかマゾな博士ですね(笑)

by 藤川 S (2011-08-05 23:25)

「三つの願い」というタイトルを見て、日本的な話かと思いきや、「魔法のランプ」発明ですから、ちょっとギャップを感じました。個人的には西洋的なタイトルの方がイイと思いました。ストーリーは、とても楽しく読むことが出来ました。読みながら「この先どうなるんだろう」と一緒にワクワク出来ました。

楽しさ・面白さだけでなく切ない気持ちにもなりました。

1つ目の願いで、ウサギやクマの人形は登場し大騒ぎするのに何故人間は登場しないのだろう、と思いました。きっと博士が人間との接点を望まなかったのですね。博士は全ての人間が「悪魔的だと後ろ指を指す」人ばかりだと思っていたのでしょうか。40年間、人の温かさに触れられず、その存在を知らないということは、とても切なく感じます。

だからこそ、1つ目・2つ目の願い事は「この記念日限定」の刹那的な願い事だったのでしょうか。

3つ目の願い、この日の為に40年間・・・なんて切なくなっていたら、実はもう7回目なんて笑えました。

この作品を読んでいる私たちも・・・実は40年ごとに7回目？なんて考えたら、ちょっと時空を超えたファンタジーですね。

私は、特に手直し箇所は必要ないと思います。でも「49回目」の方がもっと笑えますね。

by かよ湖 (2011-08-06 00:21)

面白かったです。超私好みです。なんかお間抜けでカワイイ。

ランプを拭いてみる。キュコキュコ。 の部分がもの凄く私好みです。ツボにはまっています。宴会の為にウサギやクマの人形が現れて宴会を盛り上げる所も大好きです。絵的にカワイイッ。大人の男なら美女をはべらせてもいいのには思います。そうじゃない所がこの物語の良い所です。貴重な願い事の一つを使って魔人と乾杯する所や7回も同じ人生を生きて楽しむ所など博士のキャラクターに好感が持てます。あんまり欲深くないですね。博士そのものがカワイイです。この物語は絵本にして小学生くらいの子供に見せたいです。でも大人が読んでも十分楽しめました。これを読んで気付いたのですが作品の中で楽しい雰囲気があると読んでいる方も楽しくなるのですね。とても良い事を気付かせてもらいました。ありがとうございます。深みは無いですがオチはバッチリ効いていますし字数に合った良い作品だと思います。最初の方で博士のセリフが説明調で不自然な独り言だと思いましたが全体を読んだらこの独り言がお間抜けな可愛気につながっているな。と感じました。このまま何も直す所はないと思います。

by 常夏さわや (2011-08-07 15:09)

今世紀最大の大発見が『魔法のランプ』とは何ともほのぼのとしていて、意表を付かれた感じ
です。

三つの願いの一つ目は大宴会。ウサギやクマのぬいぐるみがやって来る。これは、寂しい。人とうまくいかなかった研究者なんだろうけれど、研究というモノの宿命だと思う。人と合わせているようなら研究なんか出来ないから。

二つ目の願いは大魔神にお酒を付き合わせる。祝ってくれる人物との交流だから良いと思う。

三つ目は四〇年前に帰ってまた、同じ成功感を味わう。

ここまできてこの三つの願いが七回目というオチにビックリしました。二八〇年前から四〇年ごとに繰り返されている、人間って変わらないのだという暗喩？ でしょうか。

昔の話を使って面白く物語を作っていることに感心しました。どう直したら良いとかは思いつきません。楽しませてもらいました。

by 里子 (2011-08-07 16:01)

おとぎ話のようで楽しく読めました。

魔人のお人好しなところに好感が持てましたが、7回もとなると、本当は人が悪いのではないかと、などと思ったりしました。

このようなお話を書けるようになりたいと思います。

7回……。魔人はよく飽きませんねえ。

by パル (2011-08-10 13:17)

面白いオチに思わず笑ってしまいました。ランプの精の本題で何かな？とと思っていましたが、繰り返される博士の人生だったなんて。

博士の感じる達成感や喜び、楽しさが伝わって来るので、繰り返される人生だったとしても、博士にとっては毎回すばらしい人生なんだろうなと思いました。7回になると確信犯的なものも感じますが。博士を羨ましくさえ感じます。

オチの内容は何度か見たことがある物ですが、どこかで見たことのあるオチを使って、面白く書くというのが、一番すばらしい作品だと私は思っています。私の力不足からか、今までにないオチを考えて、物語がまとまらないという事がよくあるものですから…。 勉強になった作品でした。

by 西ノ宮 ラジオ (2011-08-11 00:29)

14 『三つの願い』（NAGATAさん）への講評

『三つの願い』（NAGATAさん）への講評

魔法のランプって発明するものなの？ という疑問を多くの方が持ったようです。たしかに魔法のランプは発明するものではなく、発見するものでしょうね。夏目みい子さんの「ランプの存在を信じて発掘を続けてきた老探検家」という提案はスムーズで、なかなかいいと思います。これなら苦労が報われた瞬間の喜びも、発明家と同様に表現することができます。かよ湖さんが、ひとつ目の願いで大騒ぎするのはウサギやクマの人形で人間が出てこないのは、きっと主人公が人間との接点を望まなかったから、という分析も的確だと思います。ふたつ目の願いで魔人と酒を酌み交わすのも、同じ意図なのでしょうね。主人公の孤独感を、より深く作中で滲み出せていたら、感傷的な気持ちを強調できたかもしれません。また、紫仙さんが感心されているように、センチメンタルな気持ちになっているところで魔人が人間という存在にぼやくところが、哲学的な含みを持ち、オチをより輝かせる効果があると思います。

ぼくが気になったのは、最後の「まーいや」という一言です。魔人は同じことを繰り返す人間について、呆れつつも、どこかで好意を持っているはずですが、しかし、この好意が「まーいや」では読者に伝わりきらない気がするのです。そのような違和感が、川越敏司さんが指摘されたように、「ぼやきが最後まで出てこないのはなぜだろう？」という感想に繋がっているのだと思います。

みなさんの評判が良いことにも現れているように、全体的にととてもよくできた作品だと思います。夏目みい子さんが書かれた「古い皮袋に新しいワイン」という諺がしっくりくる佳作だと思います。

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-08-01>

セーヌ川を見下ろすカフェにあいつはいた。写真の通り、片眼鏡をかけた気取ったやつだ。簡単な食事を済ませた後、あいつは人々でにぎわう蚤の市の中に姿を消した。

あたしは急いであいつの後を追った。市が開催されている公園には大小さまざまなガラクタが所狭しと並べられており、ごった返す人ごみの中で足の踏み場もないくらいだった。人ごみの中を縫うように進むと、あいつは東洋の置物を並べた老婆と談笑していた。

あたしは目の前にあった小物を眺めるふりをしながら、あいつの動きを見張っていた。おじさんがしつこく色々なものを勧めてきて閉口しかけていたときに、あいつは公園を出た。あたしはほっと胸をなでおろしてあいつの尾行を再開した。

通りの屋台から甘栗の焼けた甘く香ばしい匂いがして、あたしのお腹が鳴った。そういえば、まだお昼を食べていない。でも、あいつの居場所を突き止めるまでは目を離すわけにはいかない。

あいつは近くのメトロの駅に降りて行った。やけに揺れる列車の中で必死に手すりにつかまりながら、あたしはあいつの姿を観察した。鼻の形は全然違うが、あの目はきつとそうだ。暗い地下を走る列車の窓に映る自分の顔を見て、あたしは確信した。

列車を降りて改札に向かうあいつを追う。パスカードの磁気がおかしかったのか、しばらく改札を出られなかったあたしは焦った。ようやく改札を出たあたしは、数十メートル先を歩くあいつを見つけてほっとした。あいつはとあるアパルトマンに入って行った。

部屋のブザーを鳴らすと、ドアの小窓からあいつがこちらを盗み見ている。こちらが十代の少女だと知って安心したのか、あいつはドアを開けて、何の用かと尋ねた。

あたしが自分の素姓を明かすと、あいつはびっくりしていた。あたしはママに全然似ていないから無理もない。それにあの機械はまだこの時代には発明されていないから、普通ならあたしの話など到底信じられないだろう。

ともかく、あいつはあたしを部屋に入れてくれた。お腹をすかしていたあたしは、あいつが出してくれた薄い紅茶と全然甘くないクッキーを瞬く間に平らげた。それを見てあいつはちょっとあきれたような顔をしていた。

紅茶のおかわりをお願いすると、あいつは空になったティーポットを持って台所に消えた。あたしは今がチャンスと、懐に忍ばせていた薬を取り出し、それをまだほとんど手をつけていないあいつのカップに注ぎこんだ。

あいつの部屋を出たあたしは、日も暮れてすっかり人気のなくなった公園のベンチに腰掛け、

航時機(タイムマシン)を取り出した。ダイヤルをもといた時間に戻して帰途に就く。任務完了。これであたしは幸せになれる。あたしは深い満足感にひたっていた。

でも、もとの時代に戻ってもあたしの姿は全然変わっていなかった。そんなはずはない。あいつが死んで、少なくともこの切れ長の目は、ママのようにパッチリと大きな瞳になるはずだったのに。

あたしは小さい頃から鏡を見るのが大嫌いだった。どうしてあんなにキレイなママと格好いいパパからこんな不細工な女の子が生まれてきたのだろう。整形手術を受けたいと言ったら、成長期の間は無理だと諭された。あたしは家じゅうの鏡を壊して激しく泣いた。

ある日、あたしは偶然ママの日記を盗み見る機会を得た。あんなにキレイなママだから、やはり若い頃は男性との交際も派手だった。ママは、お互い仲の良い五人の男性たちと同時につきあい、肉体関係をもったらしかった。そして妊娠。生まれてきたのがあたしだった。

パパはその五人のうちの一。でも、五人のうち誰があたしにその遺伝子の半分を分け与えたのかは、結局誰にもわからないままだった。でも、パパ以外の四人の中に、あたしの顔にこんな不細工な造作を与えた犯人がいる！ その事実を知ったあたしは、パパの発明した航時機をこっそり使って、ママが妊娠する前に四人を抹殺することにしたのだ。こうすれば、あたしにはパパとママの遺伝子だけが受け継がれて、絶対キレイになれるはず………だったのに、どうして？

まだ始末していない他の男性がいたのだろうか？ あたしはママの日記がしまっている机の引き出しをもう一度探してみた。すると、引き出しの奥に落ちていた写真が見つかった。あたしは茫然とした。そこにはあたしそっくりの、整形前のママの姿が写っていた。

(終わり)

(主催者注：本作はSFマガジンに応募した作品の別バージョンであるので、作者の意向により作品タイトルの最後に+αがついています)

【川越敏司さんのHP】

<http://www.fun.ac.jp/~kawagoe/sakuhin.html>

16『五人のパパ』+α（川越敏司さん）への感想

『五人のパパ』+α（川越敏司さん）への感想

わー今日は珍しく川越敏司さまの後ではないと思ったら

ご本人様の作品の日だったのですね（素でびっくりしました←あほ）

.....一番乗りで感想を書くって結構緊張します

しかしこれまでの川越敏司さまのご勇気を見習い頑張って書かせていただきます

ほかの作品と比べタイトルを見て全く話の方向が予想つかなかったのは

これだけでした。「5人」て何?...と

オチ直前でなるほどと思いましたが、すみません、「4人を抹殺してきた」感がまったく伝わってきませんでした。ほかの男性を抹殺してきた経験があり、手慣れていることを「あいつ」追跡中・または家の中に入った後の描写中に匂わせてほしかったです（この字数だといろいろ苦しいのは重々承知の上で申し上げますが.....）

あと「航時機(タイムマシン)」とありましたが、なぜただの「タイムマシン」ではいけないのでしょうか。「航時機」という命名に作者のこだわりがあるのかもしれませんが、何の説明もないので唐突感が否めなかったです（この字数だといろいろ苦しいのは重々...以下同文←をい）。

あと、オチでいきなり「整形前のママの姿が写っていた」とあり、意味は分かりましたが、できれば（いま思いついたのでへたくそなのは大目に見てください）「引き出しの奥に古ぼけた一枚の写真が落ちていた。あたしは茫然とした。そこには、若いころのおばあさんとともに、あたしそっくりの少女が写っていた」的な「タメ」があるとよかったかなーと。

いろいろ書き連ねましたが、一人称のショートショートとしてバランスのとれたおしゃれな作品に仕上がっているのはさすがでございます。この大会のラストを飾るにふさわしい作品でございました。

by 夏目みい子 (2011-08-01 09:32)

えーと、「毒がないなあ」と思いました。それと

無邪気=かわいい

という概念があるものですから、ちぐはぐ感に少し違和感がありました。

まともりは一番良かったと思います。

by にしはじめ (2011-08-01 10:10)

アイデアの根幹に、ちょっと疑問が浮かびました。

父親以外の4人の男を殺せば、自分の遺伝子にかっこいい父親の遺伝子が入るはずだという事でこういう行動に出たわけなんだろうけど、これはどう考えても、主人公は生まれなかった事になってしまうと思います。

母親が4人のうちの一人の男と関係を持たなかった事になったら、彼女が父親との子供を妊娠する時期も違って来るでしょう。

人間って、卵子が主体なんですか？

それに精子が彩りを添えるという考え方に立っているのかと思ったりしました。

僕は一つの卵子に何億もの精子のうちどれが受精するかによってさえ全然別の人間が生まれると思っているんです。

もし、母親が主人公を妊娠した時期のごく近い時に父親との行為があったとしても、（主人公になるはずの卵子に父親が受精させたとしても）主人公は生まれないと思うんです。

だからこれは、主人公が自分に4人の男のうちの誰かさんの遺伝子さえ入らなければ、きれいになれると言う幼い思い込みをしていた少女が、4人を殺したために自分が生まれなかった事になってしまったという結末を想像しました。

人間は卵子が主体である、という事実が発見されたという事にしたらよかったのかもしれないね。

主人公の卵子に誰の精子が受精しても主人公は主人公として記憶があるはずだという事が科学的に証明された時代であるとか。

その上で主人公は、母親に主人公の卵子が留まる時期以前に4人を殺してしまって、ちょうど父親だけが恋人として母親との行為を持つように仕向ける。

そうすると、このオチへとつなげてもいいように思います。

ところが、やっぱり主人公は消えてしまうのですねー。

父親の精子には受精能力がなかったりして（笑）

by 海野久実 (2011-08-01 20:47)

読み終えた感想は、楽しめました。そしてこじゃれているなあと思いました。

出てくる小道具のチョイスや背景設定、さらに文章がリズムカルで小気味よく読めました。

内容は女の子が探偵役で可愛らしい行動、思考で良かったです。

気になったところは、オチ手前でタイムマシン、クスリと出てきた時点でオチがなんとなく分かっただけで実際そうだったので、もし違うタイトルだったらもう少しオチが効いたかなと個人的

には思いました。

by NAGATA (2011-08-01 20:58)

探偵ものらしい冒頭はよかったんですが、
中盤以降、描写にキレがなくオチも意外性がなく、
竜頭蛇尾の感が否めません。

《それにあの機械はまだこの時代には発明されていないから、普通ならあたしの話など到底信じられないだろう。》

という記述があるのに、
主人公が男に自らの素性を打ち明けてしまい、
男の方もすんなり主人公を部屋に入れているあたりが、
どうにも腑に落ちません。

自身の容姿を変えるために過去を変えるという行動に出るならば、
殺人という極端な手段に訴えるだけの理由としては説得力がないと思いました。母が本来の父となる男性以外と関係を持たないよう影ながら誘導する話にして、主人公が裏であの手この手の策略を練る話にしてみると、コミカルで面白い話になるかもしれません。

by 紫仙 (2011-08-01 23:46)

「わたし」は思い込みで突き進んでしまう。
しかし、一歩間違うと自分が生まれなくなってしまうかもしれないのに、コンプレックスを克服したいがために、気付かない。
怖いですね。

伏線効果でオチが徐々に見えてきて、やっぱり！ と楽しめました。

by せきた (2011-08-02 14:01)

「マンマ・ミーア」かと思いきや……。
場面設定は雰囲気がありますし、作品の構成はしっかりしています。
オチも面白いと思うので、あとは海野さん指摘のパラドクスをどう評価するかというところが評価の分かれ目でしょう。
個人的にはやはり少し無理があったかな、と。

by 平渡敏 (2011-08-03 16:43)

こんにちわ。

母親のように綺麗じゃない、可愛くない、どうしてこんな可愛くない自分がいるのだろうと、一種の葛藤を書かれた、女の子が自分の父親候補を次々と殺してゆく物語。

最初の探偵物の手法は「この子はどうしてこんなことをしているのだろう」と探偵風に伏線を張ったのは良かったのですが、中盤あたりで素性を明かしてしまったのでは、せっかくの伏線ももたないと思いました。

せめて素性だけは隠してしまって最後にオチをつけるという方が、作品自体にも良いのかもしれない。

ただ、未来に戻るという点では、皆さんが書かれているとおり難解が部分が目立ち、生まれる前の過去と未来の自分が生まれてきているのかも、不明な部分です。

タイムマシンが作れるほどの科学の進歩が過去と未来時間で出来るのは、やや、無理があると思われる。

だったら、はじめから近未来の世界観をつくりあげて、過去にいけるマシンが通常にあるという設定のほうが、物語としてはスムーズに入り込めるとおもいます。

by 東雲凜 (2011-08-03 22:05)

楽しく読ませていただきました。

セーヌ川、蚤の市、東洋の置物...レトロでしゃれた雰囲気ですね。

てっきり少し昔のお話なのかと思ったら、タイムマシンが出てきて意外でした。

タイムマシンを航時機としたのも、レトロっぽくて面白いですね。

未来から父親を殺しに来るという設定は、ターミネーターみたいで面白いと思いましたが、動機がちょっと気になりました。

自分の容姿を親のせいにして悩む女の子の気持ちはよくわかります。

だけどそれで父親候補を殺してしまったら、自分の存在もなくなってしまいますね。幼くて気づかなかったのでしょうか。

そこで、こんな設定はいかがでしょう。

女の子が持っていた薬は、"男のいい遺伝子だけを女の体に送り込む薬"。そんな薬が出来るかどうかは別にして、その薬を使えば人殺しをしないで済みます。

私的な感情ですが、やっぱり10代の少女に殺人はさせたくないなあ。

ラストの母親が整形だった、というオチは好きです。スカッとオチましたね。
全体的に上手にまとまっていると思います。
最初に少女の容姿にふれていないのもいいです。
美少女探偵かと思っていましたから。
楽しみました。ありがとうございました。

by リンさん (2011-08-05 17:05)

まずタイトルがおもしろいと思いました。
「パパ」が「五人」と、言葉の距離が離れているので、どんなお話になるのだろうと興味を抱かされました。

冒頭から、舞台背景や雰囲気伝わってきて、しかも少女探偵？なキャラが登場して、彼女の行動から目が離せませんでした。

しかもタイムマシンまで出てきて、過去に干渉して現在を変える、という目的で、とてもわくわくしました。

(かなりツボっております・笑)

後半は正直、オチは読めてしまいましたが、それでもキレイに着地していて、とても楽しく読むことができました。

ちゃんとまとまっていると思います。

どうして、少女が出てくると、無意識のうちに、美少女であると勝手に想像してしまうんでしょうか (笑)

パラドックスについてですが、自分はこれをドラえもんと同じ理論で解釈したので、特に問題は感じませんでした。

(ドラえもんでは、のび太の結婚相手がジャイ子からしずかちゃんに変わっても、子孫であるセワシは生まれてくることになってますからね)

しいて改善案を挙げるとすれば、なんとか殺さない方向で四苦八苦してもらいたいなあというところでしょうか。

それでも、これはこれで、軽さやギャップがおもしろいと思いますので、このままでもいいなと思います。

by 藤川 S (2011-08-06 00:12)

題からは、全然想像出来ない。綺麗なママに似ていない不細工な鬼っ子のあたしが、過去へ行って、現在のパパ以外の男を全部殺してしまうという奇想天外の話。殺人が行われるはずだが、恐くない。面白いオチでした。一部だろうけど、綺麗で可愛いだけが女の子の値打ちみたいな考え方があるのかなあ。子供を産み、娘が命と引き替えのようにして産んだ孫を見てきた私にはそんなことは小さなことなただけ。でも、そこにすっぽり羽間ってしまった、あたしの幼い行動が上手く描かれていると思います。現在に帰って、このあたしが、全く変わらない不細工なのはママからの遺伝子だったのだけれど、次、女の子がどんなに生きるか分かる感じ。楽しませてもらいました。

by 里子 (2011-08-08 14:30)

フランスの街中をあたしがあいつを追跡する。という所がワクワクしてよかったです。あいつという言い方が何者？と気になります。そして鼻の形のことや機械がまだ発明されていない。など伏線によって徐々にあいつやあたしの関係性がわかってくるのがとても自然で上手いな～と感じました。しかしオチに意外性がありませんでした。最後まで読んでああ、やっぱりね。と思いました。もっとも驚いたのは主人公の行動と動機でまさか殺人をしているなんて。と驚きました。10代の少女が毒をどこで手に入れたんだ？とあってしまいました。4人のパパを殺せば自分が綺麗なママとパパの遺伝子だけになる。とされているところでアレ？と思いました。5人のパパというけれど遺伝子を受け継いだパパは一人のハズ。そのパパを殺す。というのは自殺行為ではないでしょうか？あとタイムマシンはパパが作ったとあります。10代少女がそんな凄い機械を手に行っている点では親が作った。というのが納得いきますがなんならそのタイムマシンを作ったパパがママの恋人を殺しに行く方がしっくりきます。美人妻に全然似てない娘が生まれて不可解に思っていた男が妻の日記を見たら5人股掛けされていて自分以外の男を抹殺していった後に妻が整形美女だった事を知ってしまう。あ、これだとこの物語のあたしという幼い朗らかさが消えてしまう。もったいない。幼いことの浅はかさや残酷さは明るくていいと思います。しかし思えば10代少女は潔癖症です。ママが5股掛けていたと知ったら10代少女はけっこう傷つく気がします。美人ママが嫌いになりそうです。やっぱりこのお話はちょっと無理があるのではないのでしょうか。

by 常夏さわや (2011-08-09 12:25)

「五人のパパ」というタイトルを見て「5人の子を持つパパの長閑な話」だと予想していたので、いきなり「あいつ」という表現が出てきて、ビックリしました。いきなり「やられた！」という感じでした。

前半の尾行シーンの描写が的確で一緒に尾行を楽しませてもらいました。

地下鉄の暗い窓を鏡代わりにして自分を観る、というシーンが好きです。

でも、全体を通して「腑に落ちない」というのが率直な感想です。

パパ以外の4人を消してしまった場合、「あたし」が確実に存在できているのか？と疑問を抱きます。卵子と精子の問題・遺伝子の問題だけでなく、例えば、人は信号のタイミング1つだけで人生が変わってしまうかも知れない、というのが私の考えだからです。でも、そんな事言ってたら全然物語にならないじゃん、とも我ながら思います。

せめてラストに「あたし」への仕打ちがほしいところです。例えば、「あいつ」の顔のラインはシャープで「あたし」の唯一のチャームポイントだったのに、戻ってきて鏡を見たらエラが張ってより不細工になっていた、とか、切れ長の目はパッチリどころか一重でつり上がりより不細工になっていた、とかです。

そうそう、ママが整形していた事を匂わせるカギが「整形手術を受けたいと言ったら、成長期の間は無理だと諭された。」に伏線を張られていたのですね。うまい伏線の張り方だと思いました。

by かよ湖 (2011-08-10 00:44)

主人公はパパ以外の4人を殺そうとする。恐ろしい展開なのに、もしかしたら、主人公が話の途中で消えてしまうのでは……。ハラハラしながら、読んでしまいました。

主人公の顔の話になったとき、オチを予想することができました。

とても面白かったし、勉強になりました。

by パル (2011-08-10 13:05)

大きな代償を払ったわりに、徒労に終わった主人公残念！なお話ですね。途中、電車の窓に映る自分の顔から何かを確信する辺り、おや？と思いましたが、DNA改ざんに繋がるとは思いませんでした。

惜しいなと思ったのは、抹殺してきた？パパ達の話がなかった事。そして、主人公を5人の男を殺すミッションを持ったスパイキャラのように書くとサスペンスが深まって、もっと物語に引き込まれたかな？と思いました。

スパイで壮大なミッションのために人殺しをしてるのかと思いきや、実は自分のわがままで殺人を犯していた怖い少女とするとおおっ！と思います。最後に運命から逃げられない、しっぺ返しもありますしね。

文章は綺麗で、町の雰囲気など情景がよく伝わって来ました。

by 西ノ宮 ラジオ (2011-08-11 00:08)

17『五人のパパ』+α（川越敏司さん）への講評

『五人のパパ』+α（川越敏司さん）への講評

川越さんの作品について自分が最初に気になった点を、海野久実さんが的確に指摘してくださいました。この作品はタイムパラドクスをどう解消するかが最大のテーマになりそうです。指摘されればなるほどと思うのですが、自分も含めて、書いている作者は意外と気がつかないものです。

では、このパラドクスを解消する手段ですが、海野久実さんの「卵子が人間の主体であった！」という発想は斬新で、絶妙手だと思います。この設定は、なかなか思いつきません。海野久実さんのストーリーテラーとしてのレベルの高さを、改めて認識いたしました。

また、作品を読む限りでは、主人公は普通の少女です。普通の少女が容姿を良くするために殺人を犯してしまうことに、違和感を持たれた方が多いようです。この理由と手段のバランスについては、紫仙さんが提案されているように、コミカルな話にするのがベターかもしれませんね。藤川Sさんが提案された、殺そうと思って殺せない四苦八苦する話もあるかもしれません。

かよ湖さんが”「整形手術を受けたいと言ったら、成長期の間は無理だと諭された。」が伏線なんですねと。”というのはよく気がつかれたと思います。伏線と同時に、少女を殺人に駆り立てる理由にもなっています。ひとつの文に二つの意味を持たせるのは、見習うべき技術だと思います。

個人的には、タイムパラドクスと理由と手段のバランスさえ解消できれば、スムーズに流れる佳作になると思います！

あとながき

この大会を開催しようと思いついたのは、「作品に感想を付けてもらうにはどうしたらいいか」ということを布団の中でじんわりと考えていたときです。

多くの方が感想を求めています。しかし、現実には厳しくて、ブログにUPされている作品に感想が付くことはほとんどありません。仮に感想が付いたとしても、仲間内でお互いにほめ合うとか、どこか遠慮している面があることは否定できません。ときおり真剣な感想が付いたとしても、1人だけでは、その感想が一般的なのか、それともその人特有のクセなのか判断できません。

では、いっそうのこと、「感想を募集する大会にすればいいではないか」と発想を逆転させてみました。まさにコロンブスの卵です。その結果はといえば、いままでご覧になられたとおりです。最初は参加してくれる人が出てきてくれるのかどうか恐々でした。おかげさまで大成功を収めることができました！

まえがきでも触れましたが、最後に次回大会参加希望者のために、本大会の開催告知文を添付いたしました。「感想大会に参加したい！」という声が大きければ次回も開催しますし、小さければたぶん開催しません。

ということで、みなさんの声、ご意見、ご要望をお待ちしております。

重ね重ね、本大会に多くの方に参加・閲覧していただきまして、本当にありがとうございます。感想を書く事の楽しさや難しさだけでなく、さらには感想を書くという行為が、相手の為だけでなく自分の為にもなることを理解していただければ、主催者としてこれほど嬉しいことはありません。

それでは、また、お会いしましょう！

19（参考1）感想大会開催のお知らせ

掌編講座を卒業された方から「卒業後も目標となる何かを作って欲しい」と言われていました。普通のショートショート大会ではつまらない。なにより、実力向上に役に立つ大会にしたい。とか煮詰めていきましたら、こんな奇抜な大会になりました。興味のある方は、ぜひともご参加ください！

「実力強化キャンペーン！

掌編がみるみる上手くなる感想大会」

参加者募集のお知らせ！

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-07-10>

○目的

感想を書くというのは、骨の折れる作業です。ただ「素晴らしかった」「感動した」では感想になりません。実のある感想を書こうと思うと、「なぜ自分はこの作品を素晴らしいと感じたのか」「なぜ自分はこの作品に感動したのだろうか」という分析が必要です。

さらりと書きましたが、ここが大事なのです。

他人の作品に感想を付けるということは、とりもなおさず、その作品の良さを自分の物にするチャンスなのです。真剣になればなるほど、その作品を深く掘り下げ、または欠点を探すことになります。どこが良くて、どこが悪かったのか。さらに良くするにはどうすればいいのか。

感想を書くのはいい勉強ですよ、と薦めてもリアルな感想を書くひとはほとんどいません。酷評して人間関係を壊したらどうしようとか、場違いな感想を付けてバカにされないだろうかという恐れが先にたちます。

ということで、いっそうのこと、感想大会にしたらどうだろう？ というのがこの大会の目的です。あくまで大会です。大会だと思えば、素直な感想を書けるはずですよ。

自らの実力を高めるため、恐れることなく感想大会に参加してください！

○内容

みなさんから募集した作品のうち、5作品を順番にブログにUP（7月末予定）しますので、それぞれの作品に各自で感想をつけてください。感想の内容で勝負です！

感想募集期間は作品をブログにUPしてから2週間程度を予定します。

（*正式決定しましたら、改めてブログとメルマガで告知します）

○賞

ベスト感想賞 1人

- ・最もすぐれた感想に対して表彰。

ベスト感想人賞 1人

- ・5作品トータルで、最もすぐれた感想を書いた人を表彰。
- ・全作品に感想をつけることが条件です。

ベスト作品賞 1人

- ・もっとも熱い感想を集めた作品を表彰。
- ・感想の数ではなく、内容で判断します。

○賞品

希望者には無料で特別講座にご招待！（サイト一掌編講座とは別です）

（＊1回限りの個人指導です）

○同時募集

大会を盛り上げるためには、感想をつけるための作品も必要です。

みなさんのパソコンで眠っている作品をぜひとも投稿してください。詳しい募集要項は以下の通りです。備考は大事ですので、必ずお読みください。

<募集要項>

※混同を避けるため、作品提出メールの件名には――

実力強化大会応募作

――と書いてください。

制限文字数 1800字以内

内容不問

ファイル形式 ワード又はテキスト

締め切り 7・24

応募先 saito@arasuji.com

採用数 5 作品（予定）

著作権 著作権は作者が保有します。投稿していただいた作品を、当方が本大会以外で使用することはありません。作品を本大会以外で使用する際には、作者の了解の下に行います。

備考 作品を採用するにあたり、誤字脱字等、最低限の修正を当方で行うことがあります。事前にご了承ください。

作品を投稿された方は、採用の可否にかかわらず、必ず感想大会に参加してください。ぜひとも、大会の主旨をご理解いただければと思います。

「実力強化キャンペーン！」

掌編がみるみる上手くなる感想大会」

採用作品決定のお知らせ！

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-07-26>

『実力強化キャンペーン！ 掌編がみるみる上手くなる感想大会』採用作品決定！

掌編がみるみる上手くなる感想大会用の作品募集への応募ありがとうございます。募集期間が約2週間しかなかったにもかかわらず、おかげさまで、採用枠を越える10作品が集まりました。ご協力ありがとうございます。厳正な選考の結果、後で発表いたします5作品を採用することに決定いたしました。

ここからが本番です。いよいよ、採用された5作品にそれぞれ感想を付けていただきます。いかに素晴らしく、熱く、かつ的確な感想を書けるかが勝負です。

いつもなら控えめな感想を書いてしまう貴方も、逆襲が怖くてヨイショするような感想しか書けない君も、大会ですので、ぜひぜひ、力試しとばかりに感想をどどーんとぶつけて下さい。老いも若きも紳士も淑女も、ぜひぜひ、ご参加下さい！

ではルールです。

ぼくのブログに、7月28日(木)から順番に1作品ずつUPしていきます。

コメント欄は開放されていますので、作品を読み、自分が思ったことを素直に書いて下さい。期限は8月10日(水)です。

感想大会に採用された作品は以下のとおりです！

- ・夏目みい子さん 『微分と積分』 (7月28日 UP)
- ・東雲凜さん 『影取』 (7月29日 UP)
- ・せきたさん 『マルゴの手帳』 (7月30日 UP)
- ・NAGATAさん 『3つの願い』 (7月31日 UP)
- ・川越敏司さん 『5人のパパ』 (8月1日 UP)

採用された方はおめでとうございます。採用されなかった方はごめんなさい。

作品を決定するにあたり、作品のレベルだけでなく、できるだけ幅広いジャンルに渡るように配慮しています。

作品を投稿してくださった方は感想大会への参加は必須ですので、ぜひともお願いします。

(＊自分の作品への感想は不要ですので、あしからず)

表彰対象者と商品は以下の通りです！

【表彰者】

- ・ベスト感想賞 1人
最もすぐれた感想に対して表彰。
- ・ベスト感想人賞 1人
5作品トータルで、最もすぐれた感想を書いた人を表彰。
全作品に感想をつけることが条件です。

ベスト作品賞 1人

もっとも熱い感想を集めた作品を表彰。
感想の数ではなく、内容で判断します。

【賞品】

- ・希望者には無料で特別講座にご招待！（サイト一掌編講座とは別です）
(＊1回限りの個人指導です)

基本的に感想の形式は自由ですが、求めているのは文学論でも評論でもありません。感想を書かれる側は読んで納得し、感想を書く側も真剣に考えることで作品に潜んでいる技法を学んでいく。つまり、ウインウインの関係になるような感想を目指してください。

そこで、感想を書き慣れてない方のためにコツを伝授します。

まず、全体的な評価をします。「いい」「悪い」といった○×ではなく、読後感に得たイメージを

かぶせます。

次に良かった点、悪かった点を具体的に指摘します。抽象論はいけません。自分が感じたことを、いかに具体化できるかが勝負です。

そして、最後に改善案の提示をしますが、ここが最大のミソです。どこが悪いという指摘はできなくても、いざ、改善案を考えると、悪いと思った部分が悪くなかったことがあります。部分的には悪手でも、全体を見ると次善の策という場合があります。

自分の感想が的確なのかどうかのチェックという意味合いもありますので、この改善策の提示はぜひとも取り組んでほしいです。

最後に感想を書くときのルールです。

1) 個人批判の禁止。

評価されるのは作品であり、作者ではありません。基本的には良識にゆだねますが、あまりに酷いのはこちらで削除いたします。

2) 感想への反論禁止

今回はあくまで大会です。議論をする場ではありません。感想への反論は禁止です。

3) 既に書かれている感想を参考にするのはOK。

作品を読み、同じ感想をもたれる方も多いと思います。なので、既に書かれている感想を引用したり、参考にしたりするのは自由です。

4) 感想を書き直すのもOK

3)に関連しますが、後から書かれた感想を読んで、自分の感想を書き直すのもOKです。その場合は、感想(2)と番号を振って下さい。最後の感想だけ評価の対象とします。

5) 自作への感想の禁止

これは作品が採用された方に対してですが、自作に自分で感想を書かないで下さい。感想があるとついついお礼の返事を書きたくなりますが、大会ですのでぐっと我慢して下さい。

ルールは以上です。

コメント投稿期限は8月10日(水)までとします。

表彰者の発表は8月中旬～末を予定しています。

最後にお願いします。みなさんからいただいた感想の著作権は感想を書かれた本人に帰属しますが、二次利用の権利だけぼくにお譲りください。感想をぼくのブログやメルマガで紹介することがありますし、場合によっては電子書籍化するのも面白いかなと思っています。

二次利用の権利を譲ることに抵抗があるかたは、コメントにその旨を記載して下さい。

この件について選考には一切影響がありませんので、お気軽に記載して下さい。

それでは、たくさんの参加をお待ちしております。よろしくお祈いします！

21（参考3）表彰者発表日の決定

「実力強化キャンペーン！

掌編がみるみる上手くなる感想大会」

表彰者発表日決定のお知らせ！

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-08-21>

『実力強化キャンペーン！ 掌編がみるみる上手くなる感想大会』表彰者発表日決定！

掌編がみるみる上手くなる感想大会用の作品募集への多数の参加ありがとうございます。ただいま表彰者の選考作業の最中ですが、一足早く表彰者の発表日が決まりましたのでお知らせいたします！

表彰者発表日 8月27日（土）

お待ちかねの発表まであと1週間です。それまで、いましばらくお待ちください！

なお、表彰対象者と商品は以下の通りです

【表彰者】

・ベスト感想賞 1人

最もすぐれた感想に対して表彰。

・ベスト感想人賞 1人

5 作品トータルで、最もすぐれた感想を書いた人を表彰。
全作品に感想をつける（自作は除く）ことが条件です。

ベスト作品賞 1 人

もっとも熱い感想を集めた作品を表彰。
感想の数ではなく、内容で判断します。

【賞品】

- ・ 希望者には無料で特別講座にご招待！（サイト一掌編講座とは別です）
（＊ 1 回限りの個人指導です）

それでは、8月27日（土）をお楽しみに！

22 (参考4) 電子書籍発表日決定のお知らせ

「実力強化キャンペーン！

掌編がみるみる上手くなる感想大会」

電子書籍公開日（無料）決定のお知らせ！

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-09-03>

『実力強化キャンペーン！ 掌編がみるみる上手くなる感想大会』の全てを詰め込んだ電子書籍公開日が決定したというより、決めてしまいました。

もちろん無料です！

電子書籍発表日 9月10日（土）

表紙は大会参加者のNAGATAさんをお願いいたしました。NAGATAさんは素晴らしいショートショートも書かれますが、実は漫画家志望です。あの文章力をみると勿体ない気もしますが、漫画でも文章力は大事ですので、ぜひとも漫画の世界でも頑張ってください。

電子書籍の公開先は、以下のページになります。

【電子書籍パブー】

<http://p.booklog.jp/users/saitousou>

【デジブ】

<http://digib.jp/user#!91/item>

過去にブログで発表済みの作品がいくつかUPされていますので、そちらもあわせてお楽しみいただければと思います。

それでは、9月10日（土）をお楽しみに！

「実力強化キャンペーン！

掌編がみるみる上手くなる感想大会」

電子書籍公開のお知らせ（無料）！

記事URL

<http://takeaction.blog.so-net.ne.jp/2011-09-10>

『実力強化キャンペーン！ 掌編がみるみる上手くなる感想大会』の全てを詰め込んだ電子書籍がついに完成いたしました。表紙は前回にもお知らせしたように、NAGATAさんです。NAGATAさんが大会の雰囲気にとったりの絵を描いてくださいました。ありがとうございます。電子書籍パブーでお楽しみいただく場合は、分量がありますので、ダウンロードをオススメします。デジブでお楽しみいただく場合は、アカウントを取得した上で、作品をGETして本棚に収納してください。若干の編集をほどこしていますので、ブログで読むより分かりやすくなっていると思います。

いずれも内容は同じです。

もちろん無料ですので、今後の創作活動の羅針盤として、ぜひとも一家に一冊、常備してください！

電子書籍は以下のページでお楽しみいただけます。

【電子書籍パブー】

<http://p.booklog.jp/users/saitousou>

【デジブ】

<http://digib.jp/user#!91/item>

感想大会の開催決定からここまで進められたのは、みなさんのご協力の賜物です。この場を借りて、御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

第2回を開催する日が来ましたら、みなさんのご参加をお待ちしておりますので、よろしくお願ひします！